The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ベトナムのマテオ・リッチ : 19世紀後半における阮朝の近代化政策とキリスト教
Author(s)	多賀, 良寛
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2025, 58, p. 29-84
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100914
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ベトナムのマテオ・リッチ

── 19世紀後半における阮朝の近代化政策とキリスト教──

多賀　良寛

キーワード：阮朝／パリ外国宣教会／嗣徳帝／Jean-Denis Gauthier／阮長祚

はじめに

1802年，ベトナム史上初の南北統一政権として誕生した阮朝は，首都のフエを中心に独自の国家統合を推進した。しかし19世紀の後半になると，西洋諸国による植民地化の波がベトナムにも押し寄せてくる。その皮切りとなったのは，1858年に起こったフランス・スペイン連合艦隊のダナン砲撃であった。南部ベトナムに拠点を確保したフランスはその勢力を北部地域へと押し広げ，1884年には阮朝を保護国化する。

フランスの進出が加速する19世紀後半，長らくフエ朝廷を率いたのは，阮朝の4代皇帝・嗣徳帝（在位：1847-1883年）である。[1] 後世の歴史家たち，とりわけベトナム本国の歴史学界にとって，ヨーロッパ勢力の拡大を阻止できなかった嗣徳期のフエ朝廷は，厳しい批判の対象であった。[2] このようにネガティブなイメージの一方，植民地化の危機と急速なグローバル化を背景に，嗣徳朝が様々な革新の動きをみせていた事実は重要である。[3] その中核にあったのは，西洋の先進的技術に基づく富国強兵，近代化政策であった。陳荊和の先駆的研究が明らかにしたように，1860年代以降フエ朝廷は，西洋諸語の学習や科学技術の導入に強い関心を示し，ヨーロッパ本国ないし香港に代表されるアジア植民地都市に，幾度も官員・留学生を派遣している。[4] 西洋世界とのコンタクトを密にし，近代化政策を推進していく過程で

阮朝が強く求めたのは，東西の言語と学術に通ずる媒介者であった。当時のベトナムでその役割を最もよく果しえたのは，ヨーロッパからやって来たカトリックの宣教師と，現地のベトナム人キリスト教徒たちだったのである。

ベトナムでは17世紀以降キリスト教（基本的にはカトリック）の布教が本格化するが，その過程で中心的な位置を占めたのは，パリ外国宣教会（Missions étrangères de Paris, MEP）である。[5] 18世紀末のタイソン戦争時，阮朝の創設者となる阮福映（のちの嘉隆帝）が，MEPの宣教師・ピニョー（Pigneau de Behaine）の支援を受けたことはよく知られていよう。阮朝の成立後，嘉隆帝（在位：1802-1820）はキリスト教を容認したものの，二代皇帝である明命帝（在位：1820-1841）の治世に入り，厳しい禁教政策が取られるようになった。キリスト教に対する朝廷の態度は嗣徳帝の即位後いっそう硬化し，これがベトナム進出を目論むフランスとスペインに，出兵の大義名分を与えることとなる。フランスの進出に際会し，ベトナムのキリスト教コミュニティは複雑な立場に置かれた。[6] 禁教令に苦しんできた宣教師やベトナム人信者の間には，フランスを解放者としてその勢力拡大を歓迎する者が多くみられた。その一方，フエ朝廷の外交や近代化政策において，1860年代よりキリスト教関係者が目立った働きをしたことも事実である。従来の歴史叙述は，キリスト教勢力を植民地支配の協力者として描く傾向にあり，[7] 植民地化のさなかで阮朝と深いつながりをもつキリスト教徒がいたことは，往々にして見過ごされてきた。[8]

本稿ではキリスト教関係者が阮朝の近代化政策に果たした役割を，1867年に実施されたフランスへの使節派遣に着目して検討する。この使節派遣は，MEPの宣教師ゴティエ（Jean-Denis Gauthier, 1810-1877）と阮朝の協力によって行われたもので，西洋からの科学技術導入を目的としていた。1867年当時パリで刊行されていたカトリック系の週刊誌 *La Semaine religieuse de Paris* は，ベトナムからやって来たゴティエ一行の任務について，以下のように述べている。

カトリックの宣教活動が魂に到達するための手段は，一つに限られない。宣教活動は，時と場所の様々な要請に最大限適応しうる。17 世紀において，宣教活動は科学の装いのもとで中国に浸透したのであり，かの偉大なマテオ・リッチ（Mathieu Ricci）が北京の朝廷にとどまったのは，天文学者としてであった。今日，我々の宣教師たちがアンナン（安南）帝国の首都に赴き，フエ朝廷の信認を得るにいたるのは，エンジニアおよび数学・自然科学の教師としてなのだ。数か月前，我々は南トンキン代牧区長（vicaire apostolique du Tong-King méridional）のゴティエ司教が，嗣徳帝（l'empereur Tu Duc）から公的な任務を委ねられ，パリに到着したことを伝えた。ゴティエ司教はフランス滞在の機会を利用し，アンナン帝国における科学と機械工芸，農業そして産業の発展に裨益しうる，すべての物を収集したとされる。・・・（中略）・・・皇帝は，（キリスト教に対する）一切の迫害を止めさせただけではない。さらに驚くべきことに，西洋文明――彼がそれまで忌み嫌い，その代理人たちを執拗に排除してきたもの――を国に導入すべく，最大の努力を払っている。・・・（後略）・・・[9)]

パリのキリスト教界は，ゴティエがベトナムで果たそうとしている使命を，明朝中国におけるマテオ・リッチの事績に重ねていた。ゴティエはパリで様々な文物の収集にあたったが，これは帰国後フエで計画されていた，西洋式学校の建設を見据えてのことである。この計画のため，ゴティエは書籍や機械類とともに，教師となる人材をフランスから連れ帰っている。[10)] フエ朝廷とキリスト教の関係を考えるうえで，宣教師に導かれた遣欧使節派遣と学校建設計画は，画期的な出来事であった。

上引の記事では触れられていないが，フランスへの渡航に際し，ゴティエはベトナム人キリスト教徒とフエ朝廷の官員を同伴している。そこに含まれる阮長祚（Nguyễn Trường Tộ, 1830-1871）の存在が，この使節派遣の歴史的重要性をいっそう高めることとなった。宣教師との接触によって西洋的教養

を身につけた阮長祚は，カトリックへの信仰を維持しつつ，在野の立場から朝廷に富国強兵策を訴えた人物である。[11] 当時彼の提案はほとんど受け入れられなかったが，東西文明に通じた憂国の士として，死後多くの関心を集めることとなる。

先行研究が 1867 年の使節派遣に触れる場合，それは基本的に，阮長祚の個人史という枠組においてであった。阮長祚については，仏領期以来多くの研究が積み重ねられている。その白眉といえるのは，1988 年に出版された，チュオン・バー・カン（Trương Bá Cần）の『阮長祚：人と遺稿』であろう。[12] この著作は，漢文・字喃文献（両者を総称して漢喃文献と呼ぶ）とフランス語史料の博捜によって阮長祚の生涯を再構成した，第一級の研究書である。それと同時に，未公刊のまま残された阮長祚関連の遺稿（その多くは阮長祚がフエ朝廷に宛てた意見書）を整理・翻訳した点で，資料集としても高い価値を持つ。叙述の対象は阮長祚の参加した 1867 年の遣欧使節にも及び，この使節派遣の沿革を知る上で，現在のところ最も優れた先行研究である。[13]

阮長祚との関連で 1867 年の使節派遣を論じてきた従来の研究に対し，本稿ではこの事業を，フエ朝廷による外交・近代化政策の展開に位置付けて再検討する。また使節団に参加しながらも，従来十分注目されてこなかった人物たち――使節団を率いたゴティエ，阮長祚以外のベトナム人キリスト教徒，同行した朝廷の官員，ゴティエがフランスから連れ帰った宣教師たち――に注目し，使節派遣の歴史的意義を多角的に分析したい。これら目的のため本稿では，チュオン・バー・カンの著作がそうしたように，漢喃文献とフランス語文献の徹底的な比較検討を行う。以下，本稿で用いる諸史料を，作成主体および言語の面から三つグループに分けて紹介する。

第一のグループは漢文で記されたフエ朝廷の公式史料であり，阮朝の正史にあたる『大南寔録正編』（以下『寔録』と表記）第 4 紀（嗣徳帝の治世に相当）と，未公刊の宮廷文書群である阮朝硃本（Châu bản triều Nguyễn, 以下硃本）が挙げられる。『寔録』は使節派遣そのものについてごく簡略な記述しか行っていないが，このプロジェクトを取り巻く政治・外交状況を理解す

るうえで，たえず参照されるべきものである。いっぽう近年ハノイの国立第一公文書館（Trung tâm Lưu trữ quốc gia I）で公開の始まった硃本には，朝廷の代表として使節団に参加した官員の復命書や，使節団帰国後の学校建設に関する諸文書が残されている。その大部分は先行研究でも取り上げられておらず，硃本を用いることにより，使節派遣をめぐる阮朝側の認識に新しい光を当てることが可能となる。

第二のグループを構成するのは，フランス側に残された関連史料である。MEP のアーカイブ史料[14] およびフランス本国で刊行されたカトリック系の定期刊行物[15] には，ゴティエら宣教師たちの書簡や，彼らの動静を伝える記事が複数残されている。これら史料とくに定期刊行物は，宣教師の活躍をアピールするという目的によって固有のバイアスを帯びるものの，貴重な情報源であることに変わりはない。このほかフランス本国の外務省や海軍・植民地省（Ministère de la Marine et des Colonies）に関わるアーカイブ史料にも，使節の活動に関連する文書が残されている。フランス側の諸史料については，チュオン・バー・カンをはじめとするベトナム語ないしフランス語の先行研究において，早くから紹介・検討が進められてきた。本稿では一連の史料を原文書に立ち返って再精査し，それらを漢文史料の情報と照合していくことによって，新たな史料価値を引き出していく。

最後に第三のグループとして，漢文ないし字喃で記された阮長祚の遺稿がある。朝廷関係者に宛てた意見書をはじめ，阮長祚にまつわる遺稿類はもともとフエ朝廷の図書館に収蔵されており，このほか阮長祚の直系子孫も一部史料を保管していた。両群の史料は，仏領末期に歴史学者のダオ・ズイ・アイン（Đào Duy Anh）の手で調査され，集約版となる写本が作成されている。独立とそれに続く動乱のなか，遺稿をなす諸文書の原本こそ失われてしまったが，ダオ・ズイ・アインの作製した写本は，紆余曲折のすえハノイの史学院（Viện Sử Học）で保管されることとなった。現在同じくハノイの漢喃研究院（Viện nghiên cứu Hán nôm）にある阮長祚の遺稿集は，史学院の写本を 1960 年代に筆写したものである。[16] 現存する写本には，阮長祚自身の意

見書に加え，ゴティエや一部廷臣の手になる文書も含まれている。先に述べたように，チュオン・バー・カンは自らの著書で遺稿の整理・ベトナム語訳を試みたが，その際史料原文を提示しなかった。チュオン・バー・カンの著書に続く諸文献は，もっぱら彼の作成したベトナム語訳に依拠し，研究を進めている。こうした状況をふまえ，本稿では筆者が確認しえた漢喃研究院の写本に基づき，遣欧使節に関する記述を原文に遡って検討したい。[17)]

本稿は以下の 3 章から構成される。第 1 章では使節派遣の背景を，第一次サイゴン条約締結後の時代状況に照らして考察する。そのうえで，使節団の構成と主要メンバーの来歴を明らかにする。続く第 2 章では，フランス滞在中における使節一行の活動を検討する。最後に第 3 章では，使節の帰国後，フエにおける学校建設計画の顛末を明らかにし，使節派遣がフエ朝廷のその後の動向にいかなる影響を与えたのかについて論ずる。

1. 遣欧使節派遣の背景

(1) 時代状況

1858 年 9 月にダナンで始まったフランス・スペイン軍のベトナム侵攻は，阮朝側の防戦や遠征軍を襲った疫病の猛威により，ほどなく膠着状態に陥った。[18)] その後戦線は南部地域に移動，フランス軍は現地で執拗な抵抗を受けながらも，サイゴンをはじめ要地の占領を進めていく。このとき阮朝は北部ベトナムでも反乱勢力に脅かされており，南部における戦闘を早急に終結させる必要があった。その結果として，1862 年 6 月 5 日に阮朝とフランス・スペイン両政府との間で結ばれたのが，第一次サイゴン条約である。[19)] この条約により，阮朝はフランスに対するコーチシナ東部3省（辺和・嘉定・定祥）の割譲と巨額の賠償金支払いを課せられたほか，第 2 条で領内におけるキリスト教の信仰を公認した。明命期以来の禁教政策は，ここにいたって転換を余儀なくされたのである。

先行研究が指摘するように，第一次サイゴン条約第 2 条の条文は，阮朝領内における宣教師の移動やキリスト教徒の権利に関する具体的な規定を欠いていたため，後に様々な紛争を引き起こした。[20] またキリスト教に対する警戒心や偏見は儒教エリート層を中心に根付く残り，しばしば激しい暴力として噴出した。ただこれらの点をもって，阮朝が条約に背馳しキリスト教徒への迫害を継続したとみなすのは誤りである。[21] 条約の締結後，阮朝がそれまで拘禁されてきたキリスト教徒を解放し，没収財産の返還を行ったことは，『寔録』に明記されている。[22] また同時代の宣教師たちも，1862 年 6 月以後朝廷による表立った迫害が止んだことを一様に認めていた。キリスト教徒が宗教的な理由のみで逮捕・拘禁される事例は，もはや存在しなくなったのである。[23]

キリスト教政策と並び，第一次サイゴン条約締結後の阮朝にとって重要な政策課題となったのが，急変する世界情勢の把握と富国強兵策の実施である。条約締結から約 1 年が経過した 1863 年 6 月，嗣徳帝はフランスに割譲したコーチシナ東部 3 省の返還交渉を行うべく，外交使節をパリに派遣した。[24] この使節団を正使として率いたのは潘清簡（Phan Thanh Giản）であり，副使は范富庶（Phạm Phú Thứ），陪使は魏克愽（Ngụy Khắc Đản）が務めた。一行は 1863 年 9 月にパリに到着，翌 1864 年の 11 月に帰国する。領土の回復という主目的こそ果たせなかったが，この使節団はフランス本土と往復の経由地で見聞した多くの情報を母国に持ち帰った。帰国後，正使の潘清簡は 1867 年に悲劇的な死を遂げるが，副使だった范富庶は開明派官僚としてフエ朝廷の近代化政策をリードしていく。またフランスへの使節派遣と同じ 1863 年には，工部郎中の陳如山が広東に送られている。嗣徳帝は，今回のミッションの主目的が物品購入ではなく海外情報の収集にあることを強調し，清国の現情と広東における英仏の商業活動，そして西洋のベトナム侵略に対する諸外国の認識如何について，実地調査を命じた。[25]

海外情報が集積されるにつれ，阮朝は西洋の技術的先進性を認識し，その導入に本腰を入れ始める。嗣徳 18（1865）年，フエ朝廷はコーチシナ提督

の仲介により香港で蒸気船（敏妥火船）を調達，その翌年にもやはり香港の圃那行（Brandt & Co.）を通じて，新たな蒸気船（順捷火船）を購入した。[26] 技術学習の面でみると，嗣徳 19（1866）年，永隆・安江の 2 省で選抜された 20 人をサイゴンに派遣し，製鉄，造船，武器製造，時計や電信ケーブルの作成といった諸芸を学ばせることが決定されている。[27] なお『寔録』には，同じく嗣徳 19 年，サイゴンのコーチシナ提督がフエ朝廷に書簡を送り，「鬪巧」への参加を求めたとある。[28] 1860 年代以降ベトナムの漢文史料では，各種の博覧会を指して「鬪巧（đấu xảo）」の言葉が用いられた。ここで言及されている博覧会とは，1866 年にサイゴンで開催された，第 1 回コーチシナ物産博（Exposition agricole et industrielle des produits de la Cochinchine）を指すと考えられる。[29] その裏付けとして硃本には，1866 年に朝廷から「嘉定鬪巧場」へと派遣された范有典の視察報告が残されている。[30] 報告によると，彼が実見した展示物には「洋人」の製糖用機械や脱穀機に加え，「南圻人（コーチシナの現地民）」が持ち込んだ家畜や農林水産物，手工業製品なども含まれていた。

以上みてきたように，第一次サイゴン条約の締結後，阮朝は禁教令を撤回しキリスト教徒への態度を軟化させる一方，フランスの脅威に対抗すべく，海外情報や先端的技術の摂取に努めた。二つの流れはほどなくして交わり，阮朝は 1866 ～ 1867 年ごろから，近代化政策の推進にキリスト教関係者の助力を求めるようになる。[31] 1867 年の遣欧使節派遣が実現するのは，まさしくこのような文脈においてであった。

(2) 遣欧使節派遣の経緯と参加者たち

1867 年の遣欧使節に関する『寔録』の記述は，嗣徳 19 年 7 月条に残された，以下の簡略なもののみである。

> フランスの宣教師である厚とその弟子である阮長祚・阮條に命じ，西洋に赴いて技術者を雇用し，機械を購入させた。[32]

ここに登場する人物のうち，宣教師（原文では鑒牧）の「厚」として名前があがっているのは，冒頭で紹介したゴティエである。[33] フランスのモンテギュで生まれたゴティエは，1830 年代にベトナムへと渡り，西トンキン代牧区で布教活動にあたった。当時の厳しい禁教政策にもかかわらず，ゴティエはゲアン・ハティン地域を中心に粘り強く活動を続けた。1846 年に当該地域を対象とする南トンキン代牧区が創設されると，その指導者に任命されている。その後キリスト教への迫害がいっそう激しさを増すなかで，ゴティエは 1859 年にベトナムからの一時退避を余儀なくされる。彼がトンキンに戻ったのは，第一次サイゴン条約の締結後，ようやく 1863 年のことであった。それから 1878 年にゲアンのサードアイ（Xã Đoài）で亡くなるまで，現地で精力的な活動を続けた。 ゴティエには呉嘉厚（Ngô Gia Hậu）というベトナム名があり，阮朝側の史料にはもっぱらこの名前で登場する。ゴティエは嗣徳 17（1864）年ごろから布教活動に対する種々の障害を朝廷に訴えており，その存在は嗣徳帝の耳にも届いていたはずである。[34]

『寔録』にはゴティエと共に渡仏した弟子として，阮長祚ならびに阮條の名前が挙げられている。2 人のうち阮條については，他によるべき史料がないため，詳細は不明である。いっぽう阮長祚が朝廷に近いキリスト教徒の改革派知識人であったことは，既述の通りである。遣欧使節のプロジェクトが具体化していく過程で，阮長祚のバックグラウンドと積極的な政治活動は重要な意味を持った。そこで以下，主にチュオン・バー・カンの著作によりつつ，阮長祚のキャリアと遣欧使節派遣の経緯を確認する。[35]

阮長祚は 1830 年，ゲアン省フングエン（Hưng Nguyên）県ブイチュー（Bùi Chu）村のキリスト教家庭に生まれている。幼少期から漢学教育を受け，伝統的知識人に求められる教養を身につけたものの，キリスト教徒であったがゆえ官界に入る道は閉ざされていた。その後阮長祚はサードアイの神学校に招かれ，漢文を教え始める。彼はこの地でゴティエと出会い，フランス語と西洋の科学技術に関する手ほどきを受けることとなった。1859 年，迫害を逃れるためゴティエがベトナムを離れると，阮長祚もそれに同行し，香港へ

と渡る。このとき阮長祚が香港経由でヨーロッパに渡航したとする文献もあるが，チュオン・バー・カンはこの説に懐疑的である。カンによれば，西洋に関する阮長祚の学識は，アジア内の植民地都市――阮長祚は香港の他にも，ゴティエとともにシンガポールやペナンを遍歴していた可能性が高い――での経験や，中国の新書（近代西洋の思想や科学技術を紹介した漢文の書物）によって形成されていった。[36)]

ゴティエとともに香港に避難していた阮長祚は，1861 年にサイゴンへと戻り，フランス側の通訳として働いた。しかし彼はほどなくしてこの仕事を辞し，今度はフエ朝廷に対して，フランスとの対抗に必要な諸方策を訴え始める。阮長祚は自らのアイディアを一連の意見書にまとめ，サイゴンからフエ朝廷に提出した。このとき無官の阮長祚を朝廷に繋いだのは，かつて遣欧使節にも参加した范富庶と考えられる。[37)] このほか阮長祚は，開明的官僚として知られる陳践誠（Trần Tiễn Thành）とも関係を深めている。[38)] しかし彼がこの時期提出した意見書に対し，朝廷側からの具体的反応はなかった。なお阮長祚はサイゴン滞在中，シャルトル聖パウロ修道女会（Sœurs de Saint-Paul de Chartres）の求めでチャペルなどの施設を建設している。フランス側史料で阮長祚がしばしば「建築士（architecte）」と言及されるのはこのためである。

サイゴンで不遇の時を過ごしてきた阮長祚に，嗣徳帝とフエ朝廷が本格的な関心を寄せ始めるのは，1866 年のことである。この年阮長祚は，朝廷の蒸気船購買をめぐるトラブルを解決するため，フエに召喚された。[39)] しかし同年 2 月から 4 月にいたるフエ滞在中，朝廷から彼に具体的な仕事が与えられることはなかった。そのため阮長祚は郷里のゲアンに戻ることとし，帰路で旧知のゴティエと合流する。ゲアン滞在中（1866 年 5 月～ 8 月），阮長祚はフエ朝廷に対し，ゴティエが技術伝習用の学校建設を見据え，フランスでのエンジニア雇用と機械調達に協力してくれる旨を伝えている。[40)] この間の事情は詳らかでないが，阮朝は蒸気船に代表される西洋の先端技術を導入しつつあり，その過程でヨーロッパ本国から技術者と機械を将来しようとする

動きが起こったとしても不思議ではない。阮長祚が一連の意見書で西洋に関する該博な知識と宣教師とのコネクションを披瀝していたため，彼を通じゴティエへのアプローチが図られたのであろう。布教の拡大を図るゴティエにとっても，朝廷との間に協力関係を築くことは重要であった。1866 年 8 月，阮長祚とゴティエはフランス渡航に備えて上京し，嗣徳帝と朝廷の高官に謁見している。同年 9 月，2 人は他の渡航メンバーとともにサイゴンに移動，フランスへの出発を待った。一行がサイゴンを出航するのは，翌 1867 年 1 月 10 日のことである。[41)]

『寔録』の記事が遣欧使節の参加メンバーとして挙げるのは，ゴティエ，阮長祚および阮條の 3 名のみであった。いっぽうチュオン・バー・カンは，フランス本国に保管されている海軍省のアーカイブ史料に基づいて，フランス行きの船（L’Orne 号）に乗り込んだ使節人員を検討している。フランス側の記述によれば，使節団には阮長祚，ゴティエ，阮條に加え，助祭のグエン・ホアン（Nguyễn Hoằng）とジョアン・ヴィ（Joannes Vị），さらに阮朝の官員としてグエン・タン・ゾアン（Nguyễn Tăng Doãn）およびチャン・ヒエウ・ダオ（Trần Hiếu Đạo）が含まれていた。[42)]『寔録』の記事に名前のないこれら参加者は，いったいどのように人物だったのであろうか。

まず助祭として名前のあがるグエン・ホアンについて，彼は阮朝の各種史料に阮弘として名を残す，当時の著名なベトナム人聖職者である。1839 年，明命帝の治世の末期にハティンで生を受け，1860 年代より通訳としてフエ朝廷に協力，フランスによる阮朝の保護国化を見届け，1909 年に死去している。[43)] ここでは 1867 年の遣欧使節につながる部分に絞り，この人物と朝廷の関わりをみていきたい。阮弘の初期のキャリアは，阮長祚と多くの共通点を持っている。阮弘は最初サードアイの神学校で学び，1850 年代にペナンへ留学しているが，これはゴティエの導きによるものと考えられる。阮長祚ともこの時期から面識を持っていた可能性が高い。1861 年にはゴティエのいるサイゴンへと戻り，フランスの占領した定祥で通訳を務めた。阮弘が初めてヨーロッパの地を踏んだのは，1863 年，フエ朝廷の遣欧使節に同行し

てのことである。帰国後はしばらくサイゴンに滞在し，1866 年になってゲアンに戻った。『寔録』で阮弘の名が最初に現れるのは，遣欧使節派遣のほぼ直前にあたる，嗣徳 19（1866）年 6 月条である。それによれば，当時フエ朝廷は西洋語で記された書籍の漢訳に苦労しており，この仕事にあたれる人材を求めていた。嗣徳帝の下問を受けた機密院は，現在西洋語に習熟しているのは「道長」でなければ「道徒」であると述べ，漢字を知りかつフランス語に通暁した香溪（Hương Khê，ハティンの西部）県のキリスト教徒・阮弘を推薦する。その結果，阮弘をフエに呼んで洋書の翻訳および西洋語の教授にあたらせることが認められたのである。[44] 現在のところ，阮弘が 1867 年の遣欧使節メンバーに選ばれた直接の理由を示す史料はみいだせていない。ただ彼がすでにヨーロッパへの派遣経験を持っていたこと，また朝廷がその語学能力を高く評価していた事実に鑑みれば，この選択は自然なものといえよう。この点に加え，阮弘がゴティエや阮長祚と深い関係を持っていたことも考慮されねばなるまい。[45] 阮弘は自伝のなかで，遣欧使節への参加を以下のように記している。

> 嗣徳 19 年 8 月すなわち 1866 年 7 月になり，[46] 部（bộ）[47] から上京するよう求められ，厚神父（Đức Cha Hậu，ゴティエを指す）と吏部尚書（quan thượng lại）のグエン・タン・ゾアン（Nguyễn Tăng Doãn）[48] とともに西洋へ渡り，嗣徳 21 年正月すなわち 1868 年 2 月にいたってようやく都（フエ）に戻った。このとき王（嗣徳帝）は銀錠 10 両と各種の絹織物 8 枚を賜与された。・・・[49]

叙述は極めて簡潔で，同行者には阮長祚の名前もみえないが，阮弘は確かに遣欧使節の一員であった。なお阮弘と同様助祭としてゴティエに同行したジョアン・ヴィについては，まだその詳細を明らかにしえていない。[50]

さきに触れたように，1867 年の使節には，フエ朝廷の代表として 2 名の官員が同行したとされる。このうち阮弘の回想にも登場するグエン・タン・

ゾアンすなわち阮増阬は，1860 年代から 70 年代にかけ朝廷の外交に重要な役割を果たした人物である。阮増阬が使節団の一員として渡仏した事実は，『大南正編列伝』に収められた彼の伝記と，硃本によって裏付けることができる。『大南正編列伝』によると，嗣徳帝の治世の始まりとともに官歴をスタートさせた阮増阬は，嗣徳 18 年に最初の海外派遣を経験している。このとき阮増阬は，当時広南布政使であった鄧輝熺（Đặng Huy Trứ）とともに，「遠情を探察」すべく広東に向かった。広東から戻った後，戸部員外郎のポストを与えられた阮増阬は，さらに「法国都城」へと派遣される。[51] 法国都城は明らかにフランスのパリであり，阮増阬の渡仏を明証する記述といえよう。フランスから帰国後，阮増阬は同行したもう一人の官員と連名で復命書を作成し，滞在中の経費負担などについて詳細に報告した。硃本に収められたこの復命書については第 2 章で詳細な分析を加えるが，このとき書面に阮増阬と連署した官員は，チャン・ヒエウ・ダオではなく陳文道，すなわちチャン・ヴァン・ダオ（Trần Văn Đạo）となっている。ゴティエらとともにフランスに渡った官員は，阮増阬および陳文道の 2 名であった。

ここまでの分析が示すように，1867 年の使節派遣は，人脈の面で 1863 ～ 64 年の遣欧使節と密接なつながりを持っていた。1863 ～ 64 年の使節団に参加した范富庶は，阮長祚が朝廷とパイプを築くうえで重要な役割を果たした人物であり，同じく使節団の主要メンバーであった潘清間・魏克憚とも阮長祚は面識を有していた。また阮長祚とならびゴティエの門弟として渡仏することになる阮弘も，1863 ～ 64 年遣欧使節の参加者であった。

2. フランス渡航と現地での活動

1866 年 12 月 22 日，サイゴンでフランス行きの船を待つゴティエは，同僚宣教師のシャリエ（Pierre Charrier）に宛てて次のような書簡を書き送っている。

きたる（1867年）1月12日，私は7～8人のアンナン人とともに，ロルヌ（L'Orne）号〔国の輸送用蒸気船〕に乗船することとなっています。アンナン人の内訳は，マンダリン2名とその従者，アンナン人の司祭1名，助祭1ないし2名，クリスチャン1名〔聖パウロ修道女会の建築士（l'architecte des sœurs de st paul，阮長祚を指す）〕です。私たちは2月末ごろトゥーロンに到着できるでしょう。さきごろ私は，11月18日〔陰暦の10月12日〕付で，フエ朝廷から1通の書簡を受けとりました。つまりこの手紙が書かれたのは，我々に極めて敵対的な王国最上位のマンダリン2名が大臣職についてから，2か月近く経った後になります。そして（手紙が書かれたのは）提督（amiral）からフエ朝廷に対し，南部3省の引き渡し要請がなされた後のことです。それでもこの手紙のなかでは，フランスまでの旅を続け，ヨーロッパの科学技術とフランス語を教授できる聖職者〔ta sĩ（左士）〕を見つけてくるよう，私に強い呼びかけがなされています。私はマルセイユからローマに赴くでしょう。というのも書面で述べましたように，ローマ到着後，教皇に対して私の任務の動機と目的について説明するつもりだからです。・・・[52)]

書簡中でゴティエ自身が述べるように，1867年のベトナムでは，遣欧使節の目的実現を揺るがしかねない二つの出来事が起こっていた。第一は，宣教師に敵意を持つ有力者2名がフエで大臣職に就いたことである。ゴティエは名前こそ挙げていないが，彼が後々述べるところを勘案すると，2人の大臣とは阮知方（Nguyễn Tri Phương）および武仲平（Vũ Trọng Bình）と考えられる。[53)] その裏付けとして『寔録』は，嗣徳19（1866）年8月に両名が北部地域からフエに呼び戻され，尚書のポストに任命されたことを記している。[54)] 対仏戦で顕著な功績を挙げた阮知方は，ヨーロッパ勢力に一貫して非妥協的態度をとり，当時朝廷の保守勢力を代表する存在であった。[55)] ヨーロッパの影響に対する警戒姿勢は，武仲平にも共通する。ゴティエは後に武仲平のことを，「キリスト教徒の無慈悲な敵（l'ennemi implacable des chrétiens）」と

述べている。[56)]

人事と並ぶ第二の問題は，サイゴンの植民地政庁がみせつつあった，領土拡張の動きである。その狙いは，第一次サイゴン条約締結後も阮朝領にとどまっていたコーチシナ西部三省の獲得にあった。1866 年 10 月，コーチシナ提督のグランディエール（Pierre-Paul de La Grandière）は部下のヴィアル（Paulin Vial）をフエに派遣，朝廷に第一次サイゴン条約の改訂と西部三省の割譲を申し入れる。[57)] この申し出は当然受け入れられなかったが，植民地政庁のアグレッシブな動きは，フエ朝廷の警戒心を刺激するのに十分なものであった。

ここで引用文の内容に戻ると，ゴティエは出発に先立ち，朝廷から書簡（1866年11月18日＝嗣徳19年10月12日付）を受けとったと述べている。そしてその書簡には，上述の逆境にもかかわらず，派遣事業を推進する朝廷の変わらぬ意志が表明されていたという。一方阮朝側の史料は，間もなく行われようとする使節派遣に対し，朝廷内部で否定的な論調があったことを示している。その根拠となるのが，『寔録』嗣徳 19 年 11 月条に収められた，阮知方・武仲平・陳践誠・范富庶の連名による上疏である。[58)] 上疏の論点は朝廷の陥っている深刻な財政難[59)] にあり，多額の費用を必要とする蒸気船の導入とともに，ヨーロッパへの使節派遣が非難されている。その主張するところは，「（蒸気船の購入や補修，技術者の雇用などに膨大な経費が予想されるにもかかわらず）さらにまた西洋に使者を派遣して援助を求め，各種の機械を購入し，技術者を雇用しようとしています。これは自ら学問を広げ，速やかに富強を成し遂げようとするものですが，必要な費用は限度を超え，学習したとしても成功は困難です。（計画を）中止しようとすればさらなる面倒が生じ，議論が二転三転して国体を傷つけます。もし耐え忍んで（ヨーロッパ人を）雇用すれば，無駄な出費は多くなり，喫緊の経費はいったいどこから捻出すればよいのでしょう」というものであった。これに続け上疏は，「『西派雇買』の事を今更停止するのは難しいので，一行の帰還後（フランスの）事情が審らかとなり，もし（失った領土を）買い戻せそうであれ

ば，（再度）公式に使節を派遣」するのがよいと述べている。

以上から分かるように，ゴティエらは極めて流動的な状況の中で，フランスに旅立たざるをえなかった。それでは1867年1月にサイゴンを出航した後，一行は目的地のパリまでどのような旅程をたどったのであろうか。先に引用した書簡のなかで，ゴティエはマルセイユ到着後，まずローマに向かい教皇に状況説明を行うと述べている。一行がローマに立ち寄った可能性につき，チュオン・バー・カンはこれを直接証明する史料はないと断ったうえで，教皇との面会が行われた蓋然性は高いとする。[60] 一方硃本に含まれる阮増阮らの復命書には，彼らの辿ったサイゴン～パリ間の往復経路が具体的日付とともに記録されており，フランス側史料の欠落補うことができる。史料の細かな検討は本章の後段に譲り，往路の大まかな旅程のみを示すと，一行は1867年1月10日にサイゴン出航後，スエズ（2月14日），アレクサンドリア（2月15日～3月19日）を経て同年4月19日にフランスのトゥーロン着，[61] そこから汽車で移動し，4月21日に最終目的地のパリに到着している（後掲の［表1］も参照）。アレクサンドリアないしトゥーロンから一行が二手に別れた可能性もあるが，少なくとも阮増阮らはローマを訪問しなかったようである。

使節団がパリに到着した時期についても曖昧な点が残されている。阮増阮らの報告によると，一行がパリに到着したのは1867年4月21日であった。これに対しフランス外務省のアーカイブには，作成日時・場所として「1867年3月29日，パリ」の記載を持つ，ゴティエの書簡が残されている。[62] この記載を素直にとれば，ゴティエは1867年3月29日の時点でパリに着いていたこととなり，阮増阮らの述べるパリ到着日との間に1か月近いずれが発生する。ここでもやはり，ゴティエと阮増阮らが別行動を取っていた可能性を考えねばなるまい。本稿では最大限の時間幅をとり，使節団は早ければ1867年3月29日，遅くとも同年4月21日までにはパリに到着していたと述べるにとどめる。

一行のパリ到着とほぼ時を同じくして，4月11日には海軍・植民地省大臣

のリゴール・ド・ジュヌイー（Charles Rigault de Genouilly）から外務大臣に，フエ朝廷の漢文書簡が転送されている。この書簡はフエの商舶大臣（フランス語文書内では Ministre du Commerce）がフランス外務大臣に宛てたもので，サイゴンにいるコーチシナ提督を介し，本国の海軍・植民地省まで届けられた。[63] フランス外務省のアーカイブには，幸いにもこの漢文書簡の原文書（およびその仏語訳）が残されている。[64] フエ朝廷が使節団に託した目的を考えるうえで重要なため，以下に書簡の全文を訳出する。

> 大南管理商舶事務大臣の潘（清簡）が，大フランス国の外務大臣閣下に謹んで書簡を送りお知らせします。我々両国はすでに友誼を厚くし，互いに親睦と信頼を深めております。聞きましたところ，貴国は事物の理に精通し，技巧と機知はあらゆる面で日々進歩をとげ，それを他人に伝えることも惜しみません。我国は日頃より，（フランスに）人を派遣し実地で学習にあたらせ，誼を通じ利益と安楽を後世まで共有するのみならず，貴国の素晴らしさを顕彰したいと望んできました。貴国の鑒牧（宣教師）である呉嘉厚（ゴティエ）は久しく本国に居住し，事情を知悉しておりますが，彼がしかるべき手助けをしたいと願い出たのは，偽りのない心によるものです。すでに従者 4 人を連れ，我国の派員 2 人と一緒に（フエを出発し）嘉定（サイゴン）に向かいました。先に受け取った鑒牧の書簡によると，昨年の暮れ[65] には船に乗りヨーロッパに向かうつもりだということです。上記につき，ここに書をしたためますので，どうかお含みおきください。これから鑒牧が誠実かつ（技芸に）通暁した人間を探しあて，我国に招聘し諸芸を伝習させるにいたった場合，お手数ですが貴職のほうでも人を派遣して確認し，万全を期してくださいますよう。また（ゴティエが）ヨーロッパの物品を買い入れ我国の公用に充てることとなった際は，こちらもお手数ですが部下に命じて検査のうえ，適正な価格で購入ができるよう取計ってください。鑒牧が招聘した人材や購入した貨物について，我国のダナン港に向かうヨー

ロッパ船ないし嘉定行きの船に便乗して積み込めそうな場合，どうか貴職より船主に指示して（荷物を）引き受け輸送させ，問題のないようにしてくだされば，忝職にとってこれ以上にありがたいことはございません。新年に令を出し，貴官の安寧を遠くからお祈り申し上げます。敬具。嗣徳20年正月3日（1867年2月7日）。[66)]

この書簡は当時商舶大臣（西洋諸国との折衝を担当）のポストにあった潘清簡の名前で出されており，文中では科学技術面におけるフランスの優位性が称賛されている。またゴティエの任務が技術伝習に必要な人材の招聘と物資の調達にあり，その遂行にあたって外務大臣からしかるべき支援が望まれることを記している。

パリ滞在中，ゴティエは朝廷から委ねられた任務に答えるべく積極的に活動した。関係省庁に援助要請を行いつつ，帰国後計画されていたフエでの学校建設に備え，書籍や機械設備の収買に努めた。またベトナムで鉱産資源開発を進めるためであろうか，フランスの鉱山会社との間に契約交渉を行っていたともいわれる。[67)]

パリで海軍・植民地省がゴティエに与えた援助については，フランス国立海外公文書館（Archives Nationales d’Outre-Mer）の所蔵史料に貴重な情報が残されている。1867年6月14日に海軍・植民地省内で作成された大臣へのレポートは，ゴティエの帯びた任務と与えるべき援助について，以下のように述べる。

トンキンの司教は大臣に対し，彼が指導する教区の中心に位置するフエにおいて，気象観測所（un observation de météorologie）と物理学の実験室（un cabinet de physique）を設立する手助けをしてくれるよう求めています。司教の目的は，学術研究に観測結果を提供するだけでなく，今日の主要な発見を原住民に紹介し，彼らにその実際的な有用性を理解させ，これら住民の間でマンダリンが保ち続けている偏見を打破するこ

とにあります。加えて目的としているのは，我々の影響力を拡大すべく，フランスが最前線に立つ文明の宣教師による教育に従うことで得られるものを，住民に理解させることです。大臣のご厚意により，海軍地図保管庫（le dépôt des cartes et plans de la Marine）に対して，当該機関が準備しうる器具類を司教に提供するよう要請がなされました。このご厚意に加え，司教が実現しようとする目的にとって不可欠と技師ドラマルシュ氏（M. l' Ingénieur Delamarche）の指摘する下記器具の寄贈を，閣下に謹んで提案いたします。

電動のゴム加工機械（Machine électrique caoutchouc）・・・250 フラン
大型ポンプ，附属品付き（Machine pneumatique grande dimension, avec accessoires）・・・1,000 フラン
ルノワール社製のパンテレグラフ（Télégraphe autographique de Lenoir）・・・1,000 フラン
ガス灯装置（Appareil à gaz éclairant）・・・1,000 フラン
太陽光顕微鏡（Microscope solaire）・・・300 フラン
複式顕微鏡（Microscopes composés）2 台・・・400 フラン
合計・・・3,950 フラン

上記の金額 3,950 フランについては，コーチシナの地方予算に含まれる 1 万フランに，贈与用として計上します。（器具の）確保は海軍地図保管庫に委ねます。[68)]

ゴティエが海軍・植民地省からこのように手厚い援助を受けられたのは，当時大臣を務めていたリゴール・ド・ジュヌイーとコーチシナの間に，深いつながりがあったためと考えられる。1858 年にダナン攻撃が行われた際，遠征軍の総司令官を務めたのは，リゴール・ド・ジュヌイーその人であった。彼は当時宣教師とも良好な関係を築いていたとされる。[69)]

使節団の滞在期間中，パリでは 1855 年以来となる万国博覧会が開催されていた（会期は 1867 年の 4 月 1 日～ 11 月 3 日）。世界各国の優れた物産と技術を一同に展示する万博は，使節団の目的遂行に絶好の機会を提供したであろう。当時パリで発行されていた週刊誌は，ゴティエが「アンナン帝国の農業と工業の発展に必要な材料」を集めるべく，「博覧会で 10 万フラン以上を購入した」と伝えている。[70] ここから先行研究では，ゴティエと阮長祚が渡仏のタイミングを万博会期と意図的に合わせた可能性も指摘されている。[71] なお 1867 年のパリ万博は，日本が正式に参加・出品を行った最初の万国博覧会であった。フランスとの関係を重視する幕府は，使節代表として将軍慶喜の異母弟にあたる徳川昭武を現地に派遣しており，これとは別に薩摩藩も独自の出品を敢行している。[72] おそらくこのタイミングの一致から，ベトナムで出版された文献のなかには，「阮長祚が伊藤博文に面会した」と記すものがみられる。しかし当時伊藤博文がパリに滞在していた事実はなく，これは荒唐無稽の説といえよう。[73]

伊藤博文との接触はなかったとしても，阮長祚にとってパリ滞在は，アジア諸国の最新動向を知るための重要な機会であった。嗣徳 20 年 10 月 20 日（1867 年 11 月 15 日），阮長祚は目下取り組むべき課題を八つの領域にわたって列記し，朝廷に改革の必要性を訴えた。後に「濟急八條（tế cấp bát điều）」の名で知られるこの嘆願において，阮長祚は強い危機感とともに西洋諸国の東方進出を描写している。[74] そのうえで彼は，日本と清朝の対応策について自らが知り得た情報を，次のように記す。

> ・・・（前略）・・・日本と中国は，こうした状況（西洋の勢力拡大）を次第に認識しています。故にいま日本は，西洋諸国へ盛んに人を派遣して知識と技術を学ばせるとともに，情勢を偵察させています。現に皇子 1 名が 35 人を伴い，それに宣教師 1 名が同行してパリに滞在しており，この都市に立派な学舎を設立し，人を留学させています。先日清国は，サイゴンにいるフランス人 2 名を上海に招請し，仕事にあたらせました

〔これは私が洋行している時のことです〕。今またパリに官員1名を設置し〔ゴティエ神父がすでに彼と面談しました〕，器械の購入と（中国への）輸送を監督させています。この官員に対し清朝は，俸禄として毎年15万貫を支給しています〔彼はすでに北京へと出立しました〕。また西洋人を招請し，江蘇省に巨大な工廠を建設しています。清朝は彼らに25兆貫を支給し，やりたいようにさせています。またかつて康熙帝が行ったように，西洋の人士を北京に招き，天文・地理および格物の諸事を教授させ，中国の文紳と争論のうえ競い合わせているのです。・・・（後略）・・・[75]

ここで阮長祚が紹介する日本の皇子は，徳川昭武とみて間違いあるまい。また日本使節に同行していたという宣教師（霊牧）は，MEPのカション（Mermet Cachon, 1828-1889）と考えられる。[76] 阮長祚は，同治帝（在位：1861-1875）のもと清朝が進めつつあった洋務運動にも言及している。真偽のほどは定かでないものの，清朝の駐仏官員とゴティエとの間に接触があったという情報は興味深い。

阮長祚は「濟急八條」の末尾近くで鉄と銃の問題を論じるが，ここにも彼と同行者たちのフランス体験が反映されている。阮長祚は鉄に関する自らの議論を，フランスで訪問した「鉄廠」の描写から始める。阮長祚がゴティエ・阮條とともに訪れたこの鉄廠は，パリから離れること「フエからゲアン」ほどの場所にあるという。[77] 彼らの現地滞在は約1週間にわたったが，そこで実見した製鉄技術のインパクトは，フランスがいかにして富強に至ったかを理解させるのに十分なものあった。阮長祚によれば，この鉄廠を運営するのは民間会社であり，廠内で働く労働者は約2万，1000以上の製造ユニットを擁し，蒸気船（火輪船）や汽車（火車）など多様な製品を生産していた。また15基の溶鉱炉（火爐）によって，一日あたり約3万斤の鉄を製錬することができた。これら製品の顧客は広く国外にも及ぶとされる。[78] 阮長祚は鉄に続け，「火枚」すなわちマスケット銃へと話を進める。パリ滞在中，

使節一行は阮條の尽力によって現地の銃製造業者とつながり，派員 2 名（阮増阮と陳文道）に阮弘が同行して，彼の工場を訪れるにいたった。このときベトナム側は製造技術の学習を望んだが，教習費用などの条件面で折り合わず，具体的な成果は得られなかったようである。なお阮長祚は当地で知った日本に関する情報も紹介している。それによれば，ベトナム一行と同時期，日本人もこの工場で銃を購買していたという。また工作機械とエンジニアを将来し，日本で工場を建設する動きもあったようである。[79)]

行論でも触れてきたように，遣欧使節の動きを理解するためには，朝廷の代表として同行した阮増阮および陳文道の記録も重要である。2 人はフランスから帰国後しばらくして，嗣徳帝に復命書を提出した。当該文書は幸いにも硃本の一部として現在に伝えられている。管見の限りこの復命書を取り上げた先行研究は皆無なので，ここに詳しい検討を加えたい。復命書の前半では，パリ滞在中の体験や旅程で要した経費について，以下のような記述がみられる。

> 嗣徳 21 年 4 月 1 日（1868 年 4 月 23 日），陳文道と阮増阮が上奏いたします。嗣徳 19（1866）年 8 月，[80)] 私たちは命をうけ鑒牧の厚（ゴティエ）とともに西洋に渡りました。去年（嗣徳 20 年）の 12 月になって帰京したので，（派遣期間は）およそ 1 年 5 ヶ月あまりになります。今回勅命によって（陳文道と阮増阮は）それぞれ銀 10 両錠を 15 個ずつ賜り，また同行した英名冊・黎文富には 10 両錠 1 個が支給されましたので，全部合わせて（銀錠は）31 個となります。[81)] ただ去年はパリにおいて，たまたま博覧会が開催される時期にあたっておりました。四方からの往来は（通常時に比べ）幾倍になるか分からないほどです。滞在中における車（馬車）や船での移動費および物の値段は，そのすべてが高騰しておりました。また西洋の習俗は我々と異なります。仮に何らかの物品があった場合，民間人が買えば値段は安いですが，官長（政府高官）が買えば値段は高くなります。車や船についても，民が乗れば運賃は安いの

に対し，官長が乗ると運賃は高騰します。これが意味するところは，官長は俸給も多く裕福であり，なおかつ外国の官は遠方から来ているので，必ずや財布に余裕があるとみなされているのです。もしそこで値切ろうとすれば，まわりはみなこれを笑うでしょう。甚だしきに至っては（商品を）売ろうとしない者や，乗せるのを拒否する者もおります。残念ながら風俗はどこでも皆このようなものです。それゆえ今回私たちが移動するにあたっては，敢えて官と自称せず，また民とも商とも名乗りませんでした。馬と呼ばれようが龍と呼ばれようが，すべて人のいうにまかせていたのです。私たちは財布の事情に照らしつつ，相手側の風俗に従い，適宜斟酌して諸事にあたりました。節約できるところは節約し，それが難しければ相手に随って対応しました。無駄遣いも出し惜しみもせず，バランスをとることに努めました。この度支給された銀錠31個では，師弟3人（ゴティエ，阮長祚および阮弘を指すか）の旅程における雑費を僅かにまかなえるだけです〔例えば衣服・履物・傘・ブランケットおよび知人に対する贈り物などの買い足し。また厨夫・門夫・園夫・車夫・船夫・引路夫（ガイド）・荷担ぎ・逓信夫（郵便や電信を担当する人員か）・洗濯夫・沐浴夫（浴場で働く雇用人か）らへの支払い。そして新聞や万博パンフレット[82]の購入，食料品の買い足し，園林場（植物園か）などの参観，さらには接待に必要な茶や水など。これらはすべてその場その場で対応したものであり，帳簿などもなく，列挙するのが困難です〕。・・・（中略）・・・今回トゥーロン（とパリ）を往復するため汽車に2回乗り，トゥーロンではホテルでの滞在が2回，講道堂（宣教会の施設）での滞在が2回〔1回はパリにおいて，1回はアレクサンドリアにおいて〕でした。車代と食事代並びに公用の品を買い入れるための借入は，すべて鑒牧の厚が立て替えてくれました。どうか戸部に勅命を下して額面通り返還し，清算を行うよう願います。・・・（後略）・・・[83]。

［表1］阮増阮と陳文道の旅程

日付	旅程
嗣徳19年12月5日（1867年1月10日）	サイゴンを出航
嗣徳20年1月10日（1867年2月14日）	船がスエズに到着
嗣徳20年1月11日～2月14日 （1867年2月15日～3月19日）	汽車でアレクサンドリアに移動， 講道堂に滞在
嗣徳20年2月15日（1867年3月20日）	アレクサンドリアを出航
嗣徳20年3月15日（1867年4月19日）	トゥーロン港に到着，ホテルに宿泊
嗣徳20年3月16日（1867年4月20日）	汽車でパリに移動
嗣徳20年3月17日（1867年4月21日）	パリに到着
嗣徳20年7月21日（1867年8月20日）	汽車でトゥーロンに移動
嗣徳20年7月23日（1867年8月22日）	トゥーロンに到着，ホテルに滞在
嗣徳20年8月15日（1867年9月12日）	トゥーロンを出航
嗣徳20年8月28日（1867年9月25日）	アレクサンドリアに到着
嗣徳20年8月29日（1867年9月26日）	スエズを出航
嗣徳20年10月18日（1867年11月13日）	サイゴンに帰着

典拠：注83に同じ

復命書から伝わってくるのは，使節団がパリで直面した厳しい金銭事情である。阮増阮らは出発にあたり310両相当の銀を与えられていたが，博覧会中のパリは物価が高騰，公人であるため値切り交渉もできず，旅費のやり繰りは大変であった。また彼らの記述から，支出の一部をゴティエが立て替えていたことも判明する。

阮増阮らは復命書の後略部分において，旅程ごとに支弁した経費を記している。このうち彼らの辿ったルートを日程にそってまとめたのが［表1］である。サイゴン～パリ間の旅程についてはフランス側史料にも十分な記述がないため，貴重な情報といえよう。

ここまでの分析により，断片的ながらもフランスにおける使節一行の活動実態が浮かび上がってきた。関連省庁との折衝，持ち帰るべき文物の収買，各種工廠の見学，おそらくは万博会場の視察など，一行のスケジュールは慌ただしいものであった。時間の問題に加え，乏しい予算によって行動の自由

が制約される場面も多かったと推測される。母国での任務を終えベトナムに旅立つゴティエについて，*APF*は以下のような記述を載せている。

> 同じ月（1867年11月）の25日，南トンキン代牧司教のゴティエ師は，自らの代牧区へと再び旅立った。彼は二人の新しい宣教師――アルビ司教区のモンルジエ（Jean-Pierre-David Monrouziès）氏およびメッス司教区のルノー（Jean-Nicolas Renault）氏――を伴っている。嗣徳帝の命により，その首都（フエ）でヨーロッパの科学と機械技術をアンナン人に教授する学校を建設することとなったゴティエ師は，キリスト教徒のマンダリン2名[84]とともにフランスにやってきた。その目的は，この事業のために必要な人員と資材とを調達することにあった。司教はフランス政府からもっとも慈悲深い庇護を与えられ，さらに彼の任務を容易にするための様々な支援を受けた。（事業の）結果については，予測不可能な多くの状況に左右されることは間違いない。それでもこの事業は，長きにわたりもっとも激しい迫害の地であった帝国において，キリスト教の自由を確かなものとするのに貢献するであろう。[85]

ここでまず問題となるのは，ゴティエらがベトナムに向け出発した時期である。引用文に出発日として挙げられる1867年11月25日は，阮増阮らが記す帰路の日程と大幅に食い違っている。ここでも往路同様，両者は途中別行動をとった可能性が考えられよう。帰国に際しゴティエは同僚宣教師であるモンルジエとルノーを伴っているが，これはフエでの学校建設を見据えてのことであった。後にみるように，阮朝側史料においてモンルジエは「通（Thông）」，ルノーは「同（Đồng）」というベトナム名で登場する。なお記事では触れられていないが，実際にはこれら宣教師に加え，在俗のフランス人医師1名がゴティエについてベトナムに渡っている。[86] フランスからの帰国後，ゴティエらによる学校建設計画は，どのような運命をたどったのであろうか。

3. 使節派遣の帰結

(1) 学校建設計画の始動

ここでいったん時間を巻き戻し，使節のフランス滞在中におけるベトナムの情勢を確認しておこう。先に述べたように，使節派遣の準備が進められていた 1866 年の後半，フエ朝廷ではキリスト教に敵対的な阮知方と武仲平が影響力を拡大させていた。またサイゴンのフランス植民地政庁が領土拡張に向けた動きを本格化させ，朝廷と西洋勢力の関係はにわかに緊張し始める。はたして使節がパリに滞在している 1867 年の 6 月，フランスはコーチシナ西部 3 省を武力によって併合，阮朝は南部地域すべてを喪失することとなった。情勢が急変するなか，フエ朝廷はフランス滞在中のゴティエらに照会文を送り，早期の帰国を呼びかけている。[87] ただ現時点で，この照会文が使節団の旅程に与えた影響を具体的に示す史料はない。

サイゴン到着後，ゴティエは 1868 年 2 月末にフエへと戻り，西洋式科学を教授するための学校建設に取り掛かった。*Les Mission catholiques* 誌には，彼が同年 3 月 31 日付でフエから送った次の書簡が掲載されている。

> フエに科学教育のための学校を設立する計画が，順調に進んでいることをお知らせします。私がアンナン王国の首都に到着して数日後にあたる 2 月 29 日，国王（嗣徳帝）は我々の計画について下問し，さらに学校用の器具に関する詳細なリストを求めました。国王はまず，我々が朝廷のためフランスから持ち帰った品々を非常に興味深く観察し，さらに海軍大臣が我々に寄贈した物品をご覧になろうとしました。また同時に，教師たちの給料にも気を配ってくださいました。給料の額は控えめとはいえ，十分なものになるでしょう。また私たちが先刻知らされたところでは，王はソイエ（Sohier）師[88] に対し，教会と司教の居所との間に位置する指定区画に，大学の建設許可を出す用意があるとのことです。

機密院（le conseil du roi）における大反対を予想していたので，このようなスタートが切れたのは本当に幸いでした。この件が進みだして1か月になります。フランスへの使節派遣がフエ宮廷に引き起こした懸念と，時間を全く気にかけないこの国特有ののんびりした習慣に鑑みれば，これはかなり早いといえるでしょう。このことは，国王がいかにこの学校の整備と成功に熱心であるかを物語っています。

嗣徳王は，フランス人やキリスト教徒の臣民に対して好意的にみえます。噂によると，彼は地方官たちに向け勅文を送ったばかりで，文中では人々の非難に対し，キリスト教徒を擁護したとのことです。彼は理性と正義を尽くし，「（キリスト教徒が）朕の命と帝位を狙う謀反に加担した証拠を示すことはできない」と述べています。

私と私の周りの者たちからすれば，これらの行動には称賛の言葉しかありません。王は幾度も我々の健康状態についてお尋ねになりました。また新たにやってきた教師たちの一人一人に，高貴な装飾を施した贈り物まで届けてくださいました。未来はこのような素晴らしい門出に相応しいものとなるでしょうか？教師は生徒たちのなかに，向学心と望ましい適正を見出すことができるでしょうか？数年にわたる努力の末ようやく実を結ぶ事業の結果を，人々は辛抱強く待つことができるでしょうか？これは神のみが知ることです。今日までこの事業に与えられてきた支援と好意から，私はそれが摂理の中にあり，神によって栄光と魂の救済に導かれていることを確信しています。

王は友好的だと述べましたが，彼の周りにいる者すべてがそうではありません。大臣たちのなかでもっとも影響力の強い2人は，主君の善意を麻痺させることに努めているようです。私たちの敵はこれら有力者からの支援を期待しており，それが1月以来諸地方で起きている深刻な騒乱の主原因とみて間違いありません。・・・（後略）・・・[89)]

引用文によると，フエに戻ったゴティエ一行は嗣徳帝から極めて好意的な待

遇を受けており，学校建設計画の滑り出しは順調そのものであった。ただゴティエの言からは，当時皇帝のコントロールを越えて広がりつつあった反キリスト教の動きも看取することができる。例えば文中では，キリスト教徒を謀反の疑いで糾弾する人々に対し，その無根拠を諭す嗣徳帝の姿が描かれている。これに対応する記述を『寔録』に求めると，嗣徳 21 年 1 月，南定省の文紳である裴維琦ら 300 人あまりが名を連ね，「道長が本分を踏み越え，莠民が反乱を起こそうとしています。軍糧と武器を自弁し，力を併せて一網打尽にすることを願います」と上奏してきた一件が注目される。[90] ゴティエによれば，地方における騒擾の背後には，重臣 2 名（これは明らかに阮知方と武仲平であろう）の煽動があったという。

フエでの学校建設計画については，ゴティエから朝廷関係者に宛てた複数の漢文・字喃文書を，阮長祚の遺稿中にみいだすことができる。嗣徳 21 年 2 月 11 日（1868 年 3 月 4 日），ゴティエは学校で教授すべき学問について，詳細な稟文を提出した。[91] そこでゴティエは，西洋の諸学問を「天文」「地理」「科学」「智学」「機巧」の五領域に区分して説明し，これら学問の学習成果が一朝一夕で得られないことを，以下のように強調している。

> ・・・（前略）・・・今回私が心を傾け準備してきた諸事は，南国（ベトナム）に利があり損がないよう考えてのことです。もし朝廷が真剣に実施するのであれば，学校を設けて教授しつつ，学生の進度に応じて器具を買い足します。小からはじめて次第に大へと到り，浅きところから深きところへ入っていくのです。実際に効果があった際は，さらに専門家を雇い，ヨーロッパで行われているごとく盛んに伝習を行えば，大きな成果が得られるでしょう。ただ今回の試みは，ひとえに端を啓き蒙を発するためのもので，南人（ベトナム人）を徐々に西洋へとなじませる，ほんの手始めにすぎません。また学生の勤怠と向学心の如何もみなければなりません。それゆえ私は，まだ決定を留保しているのです。西洋においては，一人が一つの分野を長年にわたって学び，ようやく習熟する

ことができます。また規則がすでに出来上がっているため，幼少から目で見て耳で聞き，触れるところすべてから学ぶのです。これは自然の性情であるため入ってきやすく，（学習は）ベトナム人の場合より何倍も容易です。いまもし朝廷が（伝習に）タイムリミットを要求するのであれば，命に従うことはできません。かつ西洋では（勉学に対する）様々な奨励があってはじめて人々は奮起しますが，これは南国の科挙のようなものです。・・・（後略）・・・[92)]

ゴティエは自らが進めようとする事業について，極めて慎重な見通しを持っていたといえよう。

ついで嗣徳21年2月30日（1868年3月23日），ゴティエは六部に対し，学校建設の具体的なあり方を上申している。これは朝廷から出された7項目の質問に答えたもので，原文におけるゴティエの回答は，字喃[93)]で表記されている。[94)]その内容は以下のようなものであった。

一　当面は使館に学校を建設すべきか？

霊牧2名（モンルジエとルノー）の意見によると，使館は土地が低く湿気が多いため，不適当です。器具のなかでも機械類については，すぐに傷んでしまいます。また通訳をしてくれる者もおりません。したがって，後に添付した書簡に記したように，（建設場所は）金竜とし，諸事支障がないようにすることを願います。

一　教士3名は，各人がどの技芸を教授するのか？

霊牧の通（モンルジエ）が知悉しているのは，算法，天下諸国の地図，印影〔光学〕，電気，五金を分析して土・石の種目を明らかにすることです。霊牧の同（ルノー）は，算法，天文，太陽の測量による図面作成，航海を可能にする天尺の測量，高度と距離の測定，土地の測量による高低の調査，天下諸国の地図，電信ケーブルの使用，そして避雷針の制作です。教士について，[95)]難聴により学生の指導を行うことはでき

ませんが，霊牧の通を補助し五金五行の判別を行えます。また薬を作ることができますので，朝廷におかれましては，土地を与えて植物園を造り，各所を探訪して薬となりそうな草木類があれば持ち帰って園内に植え，人々が活用できるよう願います。

一　毎月支給すべき費用はどれほどか？

彼らの意図は国を助けることだけにあり，その他の思惑はございません。しかしながら，国から教師・学生に対し，衣食と家財を然るべく支給していただくよう願います。最初の 1 か月は 1 人あたり（銭）200 貫を与え，家財を整えられるようにいたします。その後は，毎月 1 人あたり 100 貫とし，衣食と使用人の雇用にあてます。国がこれ以上支給する必要はありません。

一　学生を選抜するとして（教師）は1人あたり何人を教えられるか？

学生がすでに多少を理解している場合，一度に多くに人数を教えられます。いっぽう初学者の場合は多くを教えるのが難しく，したがって教師1人は10人を教えるのが適切でしょう。

一　学生はどの年齢を採用するのか？

学生がフランス語を学びたい場合，12 ～ 20 歳から選ばなければなりません。その他の技芸であれば，20～30歳となります。

一　学生にかかる費用は毎月どれほどか？

これは朝廷次第です。ただ私が考えるに，国が学生に広く（支給）すればするほど，学生はより学習に努めるでしょう。ただ電気と五金の分析について教授する場合，多くの炭薪を消費します。よってその際には，教師から学生への指導は段階的にしてください。

一　通訳にあたりどのような人間をどれだけ確保すればよいか？

金竜に学校を建てる場合，鑒牧の平（ソイエ）が霊牧の書という者に通訳をさせます。・・・（後略）・・・[96)]

ゴティエはモンルジエとルノーの意見を引きつつ，学校の建設場所を使

館[97] から金竜（キムロン／Kim Long）に移すよう求めている。司教のソイエが居住するキムロンは，フエにおけるカトリック布教の中心地であった。1867 年には彼の指導下でこの地に教会も完成している。なお上引の文書と同日（嗣徳 21 年 2 月 30 日），ゴティエはソイエと連名で，学校の建設用地に関する別の稟文を提出している。この稟文はモンルジエとルノーの要望を取り次ぐために作成されたものだが，両名は学校建設にあたり「高広清燥」の校舎が不可欠として，建設候補地にキムロン地区内の万春（Vạn Xuân）社を挙げている。候補地はソイエの居宅の東南片に位置し，広さは 1 頃 2 畝程度，学校建設に相応しい明媚な土地であるという。そのうえで，ここに公費で学校を建設し恒久的な「国学」とすべきこと，西洋の学校（西国之場）に依拠した校舎とするため，自ら設計を指示したいとの意見が出されている。通訳を行うソイエにとっても，この立地は往来に至便であった。[98]

阮長祚の遺稿史料に残るゴティエ関連文書は，使節一行がフランスで調達した物品についても貴重な情報を含んでいる。ゴティエらがフランスで手

［表2］ゴティエがフランスで賜与された物品

名称	数量
正紀限儀	1
千里鏡	2
光学写真	1
上好鐘	2
風雨表	3
寒暑尺	5
電気通標	1
量天尺	1
顕微鏡	1
抽気筒	1
発電気	1
借地手	1
航海地図	1

典拠：『阮長祚條陳集（摺）』巻4，46a-b

［表3］ゴティエと阮長祚がフランスで購入した物品

分類	物品名（数量）	価格（単位：貫）
ゴティエの購入物品	鉄鉱並鋳錬成鉄書（5大巻）	75
	地質各層書（1部2巻）	20
	三角尺（1片）	4
	煤鉱並取五金及珠玉玉石各色書（1大巻）	30
	総共西方各国所有機巧百芸書（2大巻）	52
	銅鉱書（1巻），精錡書（1巻），鉛鉱書（1巻）	9
	地理地質図（6帳），器機図（20帳）	47
	水手（2具）	50
	紀限儀（1具）	265
	又拭皮（1張）	1
	積分銅尺（1片）	4
	両国政事（2巻）	7.2
	天文（1巻）	3.2
	釘書衣	16.4
	量熱度尺（4個）	17.2
	転木螺釘盤（3個）	31
	打鉄螺釘各盤	397
	西字典大項（2巻）	15
	西字典小項（2巻）	5
	西音話規（19巻）	18
	西音話法（6巻）	11
	土石焼成磚可以鋳鉄成汁者	5
	鉱土各層並五金類聚各色玉石	100
阮長祚の購入物品	地質各層書（1部2巻）	20
	天文（1大巻）	22
	煤鉱並取五金及珠玉玉石各色書（1大巻）	30
	地図字彙（1巻）	6
未到着の別送品	車鉄盤（1部）	140
	電気通標（2盤）	160
	光学写真（1具）並各項瓶器	720
	測量書（2巻）	4
	航海書（2巻）	11
	電気通標書（2巻）	20

典拠：『阮長祚條陳集（摺）』巻4，72b-75a

に入れた物品は，フランスの政府筋から無償供与された賜与品と，現地で買い上げた商品からなっていた。前者についてゴティエは，「西朝外国大学士」から賜った器具のうち，学校に設置する品のリストを朝廷に提示している。[99] その内訳は［表 2］の通りで，ゴティエはこれら物品の貨幣価値を，銭貨換算で総額 1 万貫程度と見積もっている。賜与品に加え，ゴティエはフランスで自身と阮長祚が購買した物品についても別文書で報告を行っている。[100]その内訳は［表3］の通りであった。

ゴティエらがフランスで入手した物品のうち，機械類をはじめとする一部の品は，ベトナム到着後長らくサイゴンで保管されることとなった。この点については，嗣徳21年10月29日（1868年12月2日）付，フエの商舶大臣からサイゴンのコーチシナ提督宛ての書簡が，若干の情報を伝える。この書簡はもともと漢文で書かれており，現在はフランス外務省の公文書館に仏訳のみが残されている。[101]書簡中で商舶大臣は，ゴティエの持ち帰った物品はサイゴンで宣教師のミッシュ（Miche）[102] が長らく保管しており，そのフエへの輸送はベトナム側が機をみて行うと述べている。[103]なおこの書簡はゴティエがフランスで購入した物品の一例として，「鉄製馬車（un char en fer），電信用機械 2 台（deux machines électriques pour télégraphe），印刷板とその備品一式（une table d’imprimerie et tous les ustensiles pour cela），解説書 2 冊（deux volume d’explications），航海技法についての書籍 2 冊（deux volumes de l’art de la navigation），電気学の概論書 2 冊（deux volumes de traité de l’électricité），電信機 2 台（deux tables d’électricité）木製の机（une table en bois），気圧計 5 台（cinq baromètres），発電機 2 台および別種の機械 1 台（deux objets à produire l’électricité et un autre de différent genre），硫酸および硝酸などの試薬 10 箱（dix boîtes de réactifs ou acides sulfurique, nitrique et autres）」を挙げている。

以上使節団がベトナムにもたらした文物につき，本章ではフランス語および漢喃史料に残された断片的記述を紹介するのみで，その踏み込んだ分析まで到達できなかった。将来された文物の全体像，文物の具体的な入手・輸送

経路，漢喃史料に記載された物品名の比定など，行うべき作業はまだ多く残されている。

(2) 学校建設の頓挫

フランスから戻ったゴティエとその同僚たちは，来るべき学校建設について様々なプランを練り，朝廷に上申を行った。しかし結論からいえば，建設計画は朝廷によって早々に中止されてしまうのである。1868年3月末の時点で計画の順調な進展を語っていたゴティエも，4月7日にはフエを去り，ゲアンへと戻っている。ゴティエが都を離れた後，彼とともに渡越したモンルジエとルノーは，ソイエのいるキムロンに落ち着いた。しかし当時フエでは反キリスト教感情が高まっており，3人はしばらくの間，文紳による攻撃の脅威に晒されることとなった。[104)]

嗣徳帝自身あれほど前向きにみえた学校建設計画が，なぜあっけなく頓挫してしまったのか。ゴティエ自身が度々示唆しているように，朝廷内で反キリスト教の立場をとっていた阮知方と武仲平が，自らの影響力を計画阻止に用いたことは容易に想像される。これに加えて当時の反キリスト教感情は，朝廷の狭いサークルを越え地方でも様々な騒擾を引き起こしており，嗣徳帝はその鎮静化に苦慮していた。このような状況下において，宣教師の主導により王都のフエで西洋式学校の建設を進めることは，政治的に極めて困難であったろう。[105)]

いっぽう硃本の諸文書は，学校建設放棄の背景に，反キリスト教感情以外の要因があったことを示唆している。建設計画が頓挫して2年以上が経過した1870年，嗣徳帝はゴティエらがフランスから持ち帰った器材の保管状況と，学校建設中止の是非について意見を徴した。これを受けて提出された礼部の上奏には，以下の興味深い記述がみられる。

> ・・・（前略）・・・（礼部が）考えますに，嗣徳21（1868）年2月，鑒牧の呉嘉厚（ゴティエ）が命によって西洋に渡り，公務を終え戻ってき

ました。買い入れた物品は御覧に供しました。それから硃批を賜り，わが部（礼部）と機密院の属員に（物品を）引き渡し，鑒牧の平（ソイエ）の元に送って保管させることとなりました。このうち引水筒一式については，別に侍衛処が収納し，武庫の督工所に引き渡したうえ，様式に照らして大盤を制作させました。わが部が属員を督工所に派遣しチェックしたところ，現時点で製造作業は完了しておりません。同時に鑒牧平の居所にも人を送り，物品を検査させたところ，保管は適切に行われております。家屋（学校）を設立する件について，当時機密院は，「呉嘉厚が教士（モンルジエとルノーたちを指す）らを連れてきましたので，学堂を建設し教育にあたらせる必要がございます。承天府（首都地域一帯を統べる行政府）より方案を出させるよう願います」との提案を行いました。該衙（承天府）が調べたところ，鑒牧平の居所の近くに空き地が一か所あり，測量の結果１畝あまりの広さでしたので，学場の建設が可能とのことでした。ついで同（ルノー）および通（モンルジエ）が人を介して上申し，「学堂を建設するにあたっては，間取りを広大にして授業をし易くするべきです。銀片（銀貨か）を払って労働者を雇用し，速やかに建物を造営して，国学にすることを願います」と述べました。これに対する該衙の見解は，「もし彼らの指示にそって間架を広大にすれば，必要な石灰や煉瓦の費用は巨額となり，計画の当初の意図と異なるでしょう。また請願するところの，彼らの銀片をもって（労働者を）雇用するという点も不適当です。以上理由とともに意見を述べ，併せて設計図を進呈いたします」とありました。（承天府の提出した図面類は）陛下からわが部と工部に回され，承天府と共同で検討することになったものの，討議した内容を覆奏するには至っておりません。いっぽう別に賜った硃批には，「（宣教師らが）教授する内容は喫緊のものといえず，多くの手間と費用がかかるうえ，適切な人材を得るのも難しい。時期尚早ということで，これ（学校建設）はしばし延期とする」とございました。その後中止されるに至った次第です・・・（後

略）・・・。[106]

礼部の回答によると，学校建設の実現を困難にした理由の一つは，そのコストにあった。モンルジエとルノーがキムロンの万春社に西洋式学校を建設しようとしていたことは既にみたが，必要経費の膨張を懸念する承天府は，この案に反対したのである。こうした状況で嗣徳帝の最終的な硃批が下り，必要性とコストに疑問符のつく学校建設は，中止に至ったとされる。

一度は学校建設の中止を命じた嗣徳帝だが，西洋からの技術導入自体には強い関心を示し続けた。上引の礼部回答を読んだ嗣徳帝は，モンルジエ，ルノーおよび阮弘のもとに人を派遣し，木材の鋸引や製鉄などに用いる機械類の伝習が可能かどうか，調査するよう命じている。礼部は員外郎の阮廷穂をソイエのもとに派遣し，彼を介してモンルジエとルノーに照会を行った。二人のうち前向きな返事を寄せたのはルノーである。ただ求められる条件として，機械の動力には「水機」でなく「火機」の使用が望ましく，またその伝習には西洋の機械が必要だと述べている。[107]

嗣徳帝はこの回答に満足せず，「言うところはみな実現困難で，（フランスから）遠路はるばるやって来た本義に背く」と批判した。そのうえで，「切に使用頻度が高く，容易で実現可能」な技術はないか，再度モンルジエとルノーに尋ねさせた。両者はこの諮問に答え，自らの意見を次のように切り出している。

・・・（前略）・・・私たちは自ら故郷を辞し貴国にやって来ましたが，常々（ベトナムに）利益をもたらそうと図り，その所行に恥じるところはございません。先ごろ私たちは，ゴティエ司教と相談のうえ，職人がよい仕事をしようとすれば，まず優れた工具が必要であると考えました。徒手にて臨めば計をなすのは困難だからです。そこで事情を西洋の官に告げ，国庫より機械を入手するとともに，周辺器具を買入れました。これによって子弟の教育が可能となり，彼らをして西洋の機械に習

熟させ，必要なものを製作できるようになるはずでした。これは図らずも中止となり，我々は自らの意志で留まり布教に従事しています。これらの機械は，なおサイゴンに置かれたままです。・・・（後略）・・・[108]

これに続け両者は，自身の伝習可能な技術について説明を加える。モンルジエの専門とする技芸にはいずれも西洋の機械が必須だが，それらはサイゴンに留置されている。これに対しルノーが行い得るのは，地図作成と測量，ネジの製造，水車建造の指導であった。なおルノーは先に照会のあった鋸引および製鉄用の機械について，動力として水力を用いる案を新たに提示している。

宣教師の知識を生かして技術伝習を行うためには，西洋の機械設備が求められる。この目的のため使節一行がフランスから持ち帰った機械類は，学校建設の中止により，活用されないままとなっていた。ここまでみてきた硃本の記述を踏まえると，フランスから将来された物品の一部はキムロンでソイエが管理し，その他の品々については，1870 年時点でいまだサイゴンに残されていたようである。技術伝習に必要な機械がサイゴンにあることを知った嗣徳帝は，その回収方法について検討を命じている。これに対する礼部の上奏によると，当時検討されていた回収プランには，1）サイゴンのコーチシナ提督に依頼しフランス船でフエに輸送してもらう，2）朝廷が船をサイゴンまで派遣しフエに持ち帰る，という二つの選択肢があった。[109]サイゴンで回収した機械類をモンルジエらに引き渡し，技術伝習に役立てるのが嗣徳帝の狙いであったが，その目論見の最終的な結果は不明である。モンルジエ自身は，1871 年にフエを離れて南トンキン代牧区のゴティエに合流，1878 年にベトナムで死去している。[110]

(3) その後への影響

フエにおける学校建設は結局実現しなかったが，阮朝は 1870 年代より，西洋からの技術導入と西洋諸語の学習にいっそうの積極性をみせ始める。こ

の動きを支えるキーパーソンとなったのが，ゴティエらとともにフランスへ渡った阮弘である。ベトナムに戻ってほどなく司祭に叙任された阮弘は，1868年8月，吏部の要請を受けフエでフランス語の教授を開始した。またこれと並行し，1870年代には香港・マカオ・広東・サイゴンに幾度も派遣され，朝廷の代理として様々な任務にあたっている。[111)]西洋世界とベトナムを結ぶ媒介者として，阮弘は朝廷に不可欠の存在となった。

フエを離れたゴティエに対しても，阮朝は相変わらず科学技術面での助力を求めていた。*APF*所収1870年11月30日付ゴティエ書簡は，当時のゲアン総督がゴティエに対し，石炭採掘および西洋式冶金学校の建設を任せられる人材はいないか暗に打診してきたことを伝える。[112)]この出来事に関連する史料として注目されるのが，1872年8月24日にゲアンのサードアイで作成された，モンルジエの書簡である。当時ゲアンを舞台に進行していた阮朝官員と宣教師の技術協力について，モンルジエは以下のように語っている。

> フエの機械設備はもう終わった。[113)]しかし，現在別の職務にあたるため首都に呼ばれているゲアン省第二位のマンダリンが，工場建設と運河採掘などを行う全権を帯びて，ほどなく戻ってくる予定である。彼はおそらく，王国でもっとも学識の深い文人である。彼は歴史学と地理学の基礎知識をもち，さらにフランスに使節として派遣されたことがあり，また産業の発展に賛同している。しかし私はほとんど期待をしていない。というのも第一に，彼がゲアンに戻ってくるのか極めて疑しいからだ。第二として，彼がいったいいつこれらの素晴らしい計画を実行に移すというのか？・・・（中略）・・・この同じマンダリンとゲアンの総督は，ゴティエ師と協力のうえ，燃料となる鉱床を探訪すべく私を呼び寄せたのだ。それは開発が困難な褐炭（lignites）に過ぎなかった。私は旅の途上でゲアンの現地を調査することができた。炭鉱は一つとして存在しないと思われるが，酸化鉄とマンガンは豊富である。・・・（中略）・・・この酷暑のなか，私は第二位のマンダリンの要請により，通常のポン

プ1基とアイアンウッド（bois de fer）製のポンプ2基を動かすべく，極めて強力な風車を建設させた。省城の濠のそばに，水車と揚水ポンプが設置された。設置作業を指揮したのは私である。人力での水汲みにかえて，この困難な仕事を風力に委ねうるメカニズムに，多数の群衆は特段の関心を示したようだ。布政使（Quan-bô）はとりわけ大きな喜びをもって，風車の羽が風を受け回転するのを眺めていた。彼はポンプと風車を（フエに）持っていき，王および廷臣の目に入れる計画を立てているそうだ。機械というものをほとんど持たないアンナン人にとって，この無邪気さは決して誇張などではない。[114)]

モンルジエによれば，ゲアンで西洋技術の導入を積極的に進めていたのは，省内で第二位のマンダリンであった。深い学識とフランスへの渡航経験を持つこの人物は，1863～64年の遣欧使節に参加した魏克愃にほかならない。魏克愃はフランスから帰国後，ゲアンで布政使の職にあった。その後嗣徳24（1871）年には署戸部参知に昇進するが，ゲアンで郷紳とキリスト教徒の対立が激化したため，現地に留まり事態の収拾にあたっていたのである。引用文中で「現在別の職務にあたるため首都に呼ばれている」とあるのは，戸部で本来のポストにつくため，魏克愃が嗣徳25（1872）年4月に上京したことを指すのであろう。[115)]当時魏克愃とゲアンの総督（尊室澈か）は，ゴティエを介しモンルジエに鉱床の調査を依頼していた。これはゴティエ自身の証言とも符合する動きである。モンルジエは資源の実地調査に加え，ゲアン省城における風車の設置を指揮し，人々の耳目を驚かせている。モンルジエがゲアンで鉱産資源の調査にあたっていたことは，硃本にも記録されている。それによれば，朝廷は嗣徳24（1871）年9月前後，モンルジエにゲアンでの炭鉱調査を委ね，鉱物のサンプルが実際にフエまで納入された。[116)]

先に触れた1870年11月30日付の書簡において，ゴティエは当時フエ朝廷が進めつつあったヨーロッパへの留学生派遣事業についても興味深い記述を行っている。

先月（1870 年 10 月），王（嗣徳帝）は大臣たちに対し，35 人の若者を選出するよう命じました。ヨーロッパの言語と科学，手工芸を学ぶべく，彼らのうちある者はパリへ，残りはロンドンへ派遣されることになっています。そのうち 12 人は，王族から選出される見込みです。大臣たちはこれに反対して，陛下の要望を満たすのに必要な資質を兼ね備えた若者を選びだすのは，至難の業だと述べました。さらにまた，旅費およびヨーロッパの大都市における滞在費は国庫にとって重い負担になると反対しています。王はそれらを重要視せず，「朕は命令を下した，朕はそれが実行されることを望む（J’ai donné des ordres, je veux qu’ils soient exécutés）」と答えたのです。この計画が示しているのは，たとえそれが実現不可能だったとしても，王は臣下によるヨーロッパ科学の学習を心から望んでいるということです。もしも王が，武仲平と阮知方の偽りの意見によって揺るがされることなく，フエに設立予定だった学校を実現させていたならば――そのために私は，あなたがたの寛大さに支えられフランスから必要な人材と資材とを持ち帰ったのですが――，ヨーロッパの技術と言語，科学を身に着けた人材は，はるかに容易く得られたことでしょう。[117)]

ゴティエの紹介する留学生派遣計画の存在は，『寔録』によってこれを裏付けることができる。それによれば，嗣徳23（1870）年8月，護衛・警蹕・神機・督工の中から年少で文字を理解できる職人 15 人を選抜し，フランスとイギリスの「都城」に派遣することが決定されている。その目的は現地における「船砲および音話字様」の学習であり，もし数年の間に頭角を現す者がいれば，異例の抜擢を行うとされた。[118)]

なお嗣徳帝は，一度頓挫したフエにおける学校建設のプロジェクトについても，後々までこれを諦めきれなかったようである。1874 年に書かれたソイエの書簡は，当時嗣徳帝がソイエに対し，フエに学校を建設するための宣教師をたえず求めていたと述べている。ソイエはこの事業が「必ずや我々の

聖なる宗教を際立たせることになるだろう」としつつも，具体的な支援を与えなかった。[119)]

最後に，フエ朝廷の官員として 1867 年の使節団に参加した阮増阬のその後をみておこう。[120)]フランスから戻った阮増阬は，朝廷の対外政策にいっそう重要な役割を果すこととなる。嗣徳 23 年の香港・マカオ派遣に続き，1873 年に北部ベトナムでガルニエ事件が発生した際には，サイゴンでフランスとの交渉に従事した。その結果 1874 年に締結されたのが，第二次サイゴン条約（フィラストル条約）である。この功績により阮増阬は，吏部左侍郎に抜擢された。1878 年になってフエ朝廷は，フランス・スペイン両政府に対する表敬とパリ万博参加を兼ね，新たな遣欧使節を派遣する。[121)]この時正使として使節団を率いたのが，ほかならぬ阮増阬であった。彼がパリそしてマドリードで使節代表の重責を果たすにあたり，1867 年のフランス滞在経験は必ずや大きな意味を持ったであろう。

おわりに

本稿では 1867 年の遣欧使節派遣を切り口として，フランス人宣教師やベトナム人キリスト教徒が阮朝の近代化政策に果たした役割を分析した。西洋からの科学技術導入を目指したこの使節派遣は，その目的およびキリスト教関係者の主導性という点で，ベトナム近代史上に際立った事業である。それは第一次サイゴン条約（1862 年）による禁教令の解除と，当時高まりつつあった朝廷の近代化志向が交わることで可能となった。この使節派遣で主導的役割を果たしたのはゴティエと阮長祚であるが，派遣事業が後に与えた影響を考えるとき，参加者に阮弘および阮増阬が含まれていた事実は軽視できない。またこの使節派遣が人脈の面で，先行する 1863 ～ 64 年の遣欧使節と連続性をもっていた点も重要である。

使節一行の旅程については史料間で若干の齟齬があるものの，パリには 1867 年の 3 ～ 4 月ごろ到着し，フランスでの滞在期間は早くて同年の 9 月，

遅ければ 11 月末までと推測される。本論でも触れたように，ゴティエと阮増阮らが途中で別行動をとった可能性はさらなる検討に値しよう。パリでゴティエらは，帰国後の学校建設に備えた文物の収集に注力する。使節がベトナムにもたらした物品は，各種機械から書籍，試薬類まで極めて多岐にわたった。しかし最終的な学校建設計画の中止により，これら文物は朝廷によって必ずしも十分活用されなかったと考えられる。少なくとも機械類については，サイゴンに留置される状況が長く続いた。万国博覧会の開催が象徴するように，当時のパリは欧米のみならずアジア・アフリカからもヒト・モノ・情報が結集する，グローバル都市であった。この場所で阮長祚が日本と清朝の動向をよくフォローしていたことは，彼の遺稿によく示されている。

朝廷内のポリティクスやサイゴン植民地政庁との関係においてみると，1867 年の遣欧使節は，極めて微妙な時期に計画・実施されたといえる。当時朝廷では反キリスト教的立場をとる阮知方と武仲平が大臣職につき，強い影響力を持つようになっていた。また使節がベトナムを離れている間に発生したフランスのコーチシナ西部三省占領は，西洋勢力とキリスト教に対する反感を増幅するのに十分な出来事であった。フランス・ベトナム双方の史料から伺えるのは，嗣徳帝個人が学校建設と西洋の科学技術導入に強い意欲を持っていたことである。しかし当時の政治情勢と危機的な財政によって，学校建設は早々の挫折を余儀なくされる。

ただ学校建設が実現されなかったことをもって，1867 年の遣欧使節が無意味に終わったということはできない。西洋の科学技術に対する朝廷の関心は，使節派遣後むしろ高まっていったようにもみえる。学校建設の計画が消滅した後も，宣教師を通じた科学技術導入の試みは続けられ，朝廷内では西洋本国への留学生派遣計画が持ち上がっていた。またベトナム人キリスト教徒についていうなら，1870 年代に宮廷が東西文明の媒介者として重用したのは，遣欧使節帰りの阮弘であった。その後西洋世界に対する阮朝の認識は，1878 年の遣欧使節派遣によっていっそうの拡大をとげる。そして 1867 年と同様 1878 年の遣欧使節においても，ベトナム人キリスト教徒が一団に

同行し，通訳として重要な役割を果たすこととなった。[122] 1870年代以降における阮朝の近代化政策と遣欧使節派遣，そこにおけるキリスト教徒に役割については，これを今後の検討課題としたい。

［注］

1） 嗣德期のベトナム，とりわけ政治外交史については，坪井善明『近代ヴェトナム政治社会史：阮朝嗣德帝統治下のヴェトナム 1847-1883』東京大学出版会，1991年が基本文献である。筆者自身も財政史の立場から，嗣德期の重要性について論じたことがある。多賀良寛「財政史よりみた19世紀後半における阮朝統治の再検討」『東洋史研究』79-1，2020年，108-143頁。

2） こうした立場を示す文献は枚挙にいとまがないが，一例として Nguyễn Khánh Toàn (ed.), *Lịch sử Việt Nam*, tập 2, Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội, 2004, pp. 66-71を挙げておく。

3） 嗣德期にみられた革新の諸潮流については，以下の論文集がよくまとまっている。Đỗ Bang et al., *Tư tưởng canh tân đất nước dưới triều Nguyễn*, Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội, 2019.

4） 陳荊和「嗣德時代ベトナムの近代化志向と香港」『創大アジア研究』12，1991年，45-74頁。

5） ベトナムにおける MEP の活動については，1990年代よりアーカイブ史料を用いた新しい研究が加速している。阮朝の成立後，19世紀前半の時期を扱った専論として，英語圏では Jacob Ramsay, *Mandarins and Martyrs: The Church and the Nguyen Dynasty in Early Nineteenth-Century Vietnam*, Stanford, Calif.: Stanford University Press, 2008 が重要であり，日本では牧野元紀が精力的な研究を進めている。

6） ベトナムの植民地化とキリスト教の関係については，Charles Keith, *Catholic Vietnam: A Church from Empire to Nation*, Berkeley: University of California Press, 2012, chapter 1 にバランスの取れた記述がみられる。

7） 例えば以下の文献を挙げることができる。Cao Huy Thuần, *Les missionnaires et la politique coloniale française au Vietnam (1857-1914)*, New Haven, CT: Yale Council on Southeast Asian Studies, Yale Center for International and Area Studies Lạc Việt Series, 1990.

8） 後述する阮長祚の存在は，そのもっとも重要な例外である。

9） *La Semaine religieuse de Paris,* 28 décembre 1867, p. 731. 以下，引用文中の（　）は

引用者による補足,〔　〕は原注とする。ゴティエをマテオ・リッチになぞらえるこの興味深い記事の存在は，Trương Bá Cần, *Hoạt động ngoại giao của nước Pháp nhằm củng cố cơ sở tại Nam Kỳ (1862-1874)*, Hà Nội: Nhà xuất bản Thế Giới, 2011, p. 279によって教えられた。

10）Adrien Launay, *Histoire génerale de la Société des missions-étrangères*, tome 3, Paris: Téqui, 1894, p. 482.

11）阮長祚が朝廷に訴えた諸政策は，フランスとの和平確立，キリスト教徒に対する宥和，王権の維持強化，西洋の資本・技術を用いた天然資源開発，実学の重視，行財政の合理化，漢字にかわる字喃使用の推進など多方面にわたった。Vinh Sinh, “ Nguyen-Truong-To and the Quest for Modernization in Vietnam,” *Japan Review* 11, 1999, pp. 58-60.

12）Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ: Con người và di thảo*, Thành phố Hồ Chí Minh: Nhà xuất bản Thành phố Hồ Chí Minh, 1988.

13）内容に重なりこそみられるが，チュオン・バー・カンはコーチシナの植民地化過程を扱った別の著作においても，1867年の使節派遣について言及している。Trương Bá Cần, *Hoạt động ngoại giao của nước Pháp nhằm củng cố cơ sở tại Nam Kỳ*, pp. 195-196, 212, 278-279.

14）現在はMEPが主体となって運営するパリのフランス・アジア研究所（L’ Institut de recherche France-Asie, IRFA）で閲覧に供されている。

15）宣教師の活動を紹介すべく，信仰普及協会（Œuvre pour la propagation de la foi）により発行されていた『信仰普及年報』（*Annales de la propagation de la foi*，以下*APF*）や *Les Missions catholiques* といった雑誌が代表的である。信仰普及協会と*APF*については，牧野元紀「阮朝紹治期ベトナム北部におけるキリスト教宣教をめぐる諸相：パリ外国宣教会「南トンキン代牧区」設立の背景について」『東洋文化研究』11，2009年，101-104頁を参照。これら定期刊行物は，ときにアーカイブ史料にも見られないMEP宣教師の報告が掲載される点で貴重である。

16）阮長祚の遺稿とその写本作成をめぐる経緯は，Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ*, pp. 103-105および同書に再録されたダオ・ズイ・アイン自身の回想文に詳しい。

17）筆者が漢喃研究院で閲覧したのは，VHv. 2620/1-5の請求記号を持つ5巻構成の写本である（漢喃文献の代表的カタログである *Di sản hán nôm Việt nam: Thư mục đề yếu*, tập 2, Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội, 1993, p. 446は当該史料の請求記号をHv. 2620/1-5とするが，これはVHvの誤り）。全5巻のうち，巻1~3は「阮長祚條陳集」，巻4は「條陳摺（阮長祚撰）　阮長祚小史」，巻5は「條陳摺（教士阮長祚撰）」の表題を持つ。本稿でこれらを引用する場合，便宜的に『阮長祚條陳集（摺）』＋巻数という形をとる。チュオン・バー・カンによれば，VHv. 2620/1-4は史学院所蔵写本のHv. 189/1-4，VHv. 2620/5は史学院所蔵写本のHv. 135に基づくとい

う。本稿執筆時点で，筆者は残念ながら史学院所蔵の写本を実見することができなかった。その検討は今後の課題としたい。

18） Sunny Le Galloudec, “ La prise de Tourane (Đà Nẵng), 1858-1860: L’échec d’une stratégie de la canonnière sur les côtes indochinoises,” in Dominique Barjot et Jean-François Klein (eds.), *Rencontres impériales: l’Asie et la France. Le «moment Second Empire»*, Paris: Maisonneuve et Larose, 2023, pp. 245-261.

19） ベトナム本国では壬戌和約 (Hòa ước Nhâm Tuất) と呼ばれる。第一次サイゴン条約締結前後の政治状況については，Mark McLeod, *The Vietnamese Response to French Intervention, 1862-1874*, New York: Praeger, 1991 を参照。なおマクラウドには阮長祚に関する論考として，Mark McLeod, “ Nguyen Truong To: A Catholic Reformer at Emperor Tu-duc’s Court,” *Journal of Southeast Asian Studies* 25-2, 1994, pp. 313-330 もある。実証面をチュオン・バー・カンの著作にほぼ依拠した内容だが，英語圏で出版された文献としては，このテーマに関する数少ない専論である。

20） Trương Bá Cần (ed.), *Lịch sử phát triển Công giáo ở Việt Nam*, tập 2, Hà Nội: Nhà xuất bản Tôn giáo Hà Nội, 2008, p. 238.

21） McLeod, *The Vietnamese Response to French Intervention*, pp. 94-95.

22） 例えば『寔録』第 4 紀（慶應義塾大学言語文化研究所影印本，1979-1980 年），巻 26，30a-b および 36b。

23） Trương Bá Cần (ed.), *Lịch sử phát triển Công giáo ở Việt Nam*, pp. 236-237.

24） 1863 年から 64 年にかけて行われたこの使節派遣の概要と，関連するベトナム側史料については，Tạ Trọng Hiệp, “Le journal de l’ambassade de Phan Thanh Giản en France (4 juillet 1863 – 18 avril 1864),” in Claudine Salmon (ed.), *Récits de voyages des Asiatiques*, Paris: École française d’Extrême-Orient, 1996, pp. 335-363 を参照。

25）『寔録』第 4 紀，巻 28, 33a-b。

26） 陳「嗣德時代ベトナムの近代化志向と香港」，53-54 頁。

27） 同上，46 頁。

28）『寔録』第 4 紀，巻 34，26b-27a。

29） この物産博については，P. Cultru, *Histoire de la Cochinchine française des origines à 1883*, Paris: Augustin Challamel, 1910, pp. 287-290 に詳しい記述がみられる。

30） 硃本（ベトナム国立第一公文書館所蔵），嗣德朝，第 381 集，89a-b，嗣德 19 年 4 月某日，製造司司務范有典禀。

31） Trương Bá Cần (ed.), *Lịch sử phát triển Công giáo ở Việt Nam*, p. 243.

32）『寔録』第 4 紀，巻 35，15a。
命富浪沙鑒牧厚與其徒阮長祚・阮條等，如西雇工匠買機器。

33） MEP に所属した各宣教師の履歴については，IRFA のホームページでデータベースが提供されている。ゴティエについても当該データベースの記載を参照した

（https://irfa.paris/missionnaire/0417-gauthier-jean/　2024年7月2日最終閲覧）。

34）例えば『寔録』第4紀，巻29，27aおよび同30b-31aなど。

35）以下阮長祚に関する記述は，Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ*, pp. 19-43による。具体的な参照頁数については，論旨にとってとくに重要と思われる箇所に限り，その都度注記する。

36）Ibid., pp. 21-23. 阮長祚の西洋認識に中国の新書が重要な役割を果たしたという指摘は，Vinh Sinh, “Nguyen-Truong-To and the Quest for Modernization in Vietnam,” pp. 62-67にもみられる。

37）1862～64年にかけ，阮長祚と范富庶はサイゴンで複数回にわたり面会の機会を持っている。また遣欧使節がフランスからサイゴンに帰着した際（1864年），阮長祚は范富庶のみならず潘清簡・魏克愃とも接触し，国策について議論したという。Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ*, p. 26.

38）陳践誠のキャリアおよび彼と阮長祚の関係については，Đào Duy Anh, “Les grandes familles de l’Annam, S.E. Tran-Tiên-Thanh,” *Bulletin des Amis du Vieux Huê* (1944/4-6)を参照。

39）このとき阮長祚に白羽の矢が立ったのは，富国策を訴える彼の意見書が嗣徳帝の注意を引いたためといわれる。Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ*, p. 33.

40）Ibid., p. 35.

41）Ibid., p. 41.

42）Ibid., p. 44.

43）阮弘の生涯については，*Sacerdos indosinensis*の1936年1月号（453-455頁）および2月号（498-500頁）に掲載された自伝記事で詳細を知ることができる。自伝記事の原文は，クオックグー（ローマ字表記のベトナム語）で記されている。Cao Vĩnh Phan, *Lịch sử giáo phận Vinh*, San Jose: Hội Ái hữu địa phận Vinh Bắc California, 1996, pp. 399-403がその全文を紹介しているものの，書誌情報（原雑誌の掲載頁数）に誤りがみられる。

44）『寔録』第4紀，巻34，35b-36a。このエピソードについては陳「嗣徳時代ベトナムの近代化志向と香港」，46頁も参照。

45）フランスへの出発前，ゴティエはベトナム人キリスト教徒をフランスに一年程度留学させる計画を持っていたようである。この計画のため阮長祚が朝廷に推薦した候補者に，阮弘の名前が含まれている。Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ*, p. 39.

46）嗣徳19年8月は陽暦に換算すると1866年の8月29日～9月27日の期間に相当するため，これは原著者の誤りであろう。

47）阮朝の中央省庁である六部（戸部・礼部・吏部・工部・兵部・刑部）のいずれかであるが，ここでは対外関係を管轄した礼部を指すと考えられる。

48）阮朝側の記述によると，グエン・タン・ゾアン（阮増阮）が吏部尚書のポスト

を与えられたのは，彼自身二度目となるヨーロッパ派遣から帰国後の，嗣徳 31（1878）年である（『寔録』第 4 紀，巻 60，34b）。1867 年の使節派遣時点における彼の肩書は，後述するように戸部員外郎であった。

49） P. Hoằng, “Tiểu sử cha Paul Nguyễn Hoằng,” *Sacerdos indosinensis*, 1936, số 1 Janvier, p. 454.

50） 阮長祚の遺稿には，帰国後使節メンバーに与えられた恩賞のリストが収録されており，対象者として「（阮）條」「（阮）弘」とともに「謂」という人物が挙がっている（『阮長祚條陳集（摺）』巻 4，漢喃研究院所蔵，VHv. 2620/4，59a）。謂という漢字のベトナム語音は vị であるから，おそらくこの人物がジョアン・ヴィにあたるのであろう。

51） 『大南正編列伝』第二集（慶應義塾大学言語文化研究所，1981 年），巻 36，24b-25a。

52） Lettre de Mgr. Gauthier au Père Charrier, 22 décembre 1866, Archives des Missions étrangères de Paris (l’ Institut de recherche France-Asie，以下 AMEP), vol. 709, fol. 240.

53） ゴティエ自身は，使節派遣からの帰国後フエでの学校建設が失敗した理由として，阮知方と武仲平による妨害を挙げている。Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ*, p. 52. 武仲平が学校建設に反対していたことについては，Laurent Burel, *Le contact protocolonial Franco-Vietnamien en Centre et Nord Vietnam, 1856–1883*, Thèse Paris VII, 1997, pp. 384-385 にも言及がみられる。

54） 『寔録』第 4 紀，巻 35，16a-b。このとき阮知方と武仲平にはそれぞれ兵部尚書と吏部尚書のポストが与えられ，両者ともに機密院大臣の地位を占めることとなった。

55） 坪井『近代ヴェトナム政治社会史』，154-155 頁。

56） *APF* 43, 1871, p. 235.

57） Cultru, *Histoire de la Cochinchine française des origines à 1883*, p. 114. なおヴィアルのフエ到来については，『寔録』第 4 紀，巻 35，23a-b に対応する記事がみられる。

58） 『寔録』第 4 紀，巻 35，49b-51a。

59） この時期阮朝が陥っていた財政難の背景として，コーチシナ東部三省の割譲による税収喪失，第一次サイゴン条約によって課せられた巨額の賠償金支払い，さらには北部ベトナムでの軍事支出増大といった要因を指摘できる。多賀「財政史よりみた 19 世紀後半における阮朝統治の再検討」，120-126 頁。

60） Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ*, p. 44.

61） 1867 年にはスエズ運河がまだ開通していなかったため，一行はスエズからアレクサンドリアまで汽車で陸路を移動している。

62） Archives du ministère des Affaires étrangères (site La Courneuve, 以下 AAE), Mémoires

et documents, Asie, 8MD/29bis, fol. 34. チュオン・バー・カンはこの文書に基づき，ゴティエと阮長祚らが少なくとも 1867 年 3 月末の段階でパリに到着していたとする。Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ*, p. 45.

63） AAE, Mémoires et documents, Asie, 8MD/29bis, fol. 36.

64） この書簡については，つとにヴォ・ドゥック・ハインが文書の写真を紹介しており（Vo Duc Hanh, *La place du catholicisme dans les relations entre la France et le Viet-Nam de 1851 à 1870*, tome II–III, Leiden: Brill, 1969, pp. 341-346），その内容の一部に陳荊和も言及している。陳「嗣德時代ベトナムの近代化志向と香港」，46-47 頁。本稿の作成にあたり，筆者は外務省公文書館で原文書を確認のうえ，全文の訳出にあたった。

65） この書簡は嗣德 20 年の正月に書かれているので，嗣德 19（1866）年の年末を指す。

66） AAE, Mémoires et documents, Asie, 8MD/29bis, fol. 37-39.
大南管理商舶事務大臣潘肅書大富浪沙管理外國商舶事務大學士貴職閣下青炤。我兩國既敦和誼信睦相孚。稔聞貴國精於物理，凡一應工巧機智日加精進，不惜傳播于人。本國常欲派人随事學習，以通和睦之情而久後同其利樂，又益表貴國之美。茲有貴國鑒牧呉嘉厚久居本國，頗悉情事，願爲随宜挈護，出自眞心。經帶随從者四人，同本國派員二人，併往嘉定。近據該鑒牧覆敍，訂去臘搭船回西。輒此具書耑祈鑒諒。嗣鑒牧如有訪得誠寔諳熟底人，延來本國傳習諸方法，多煩貴職委人察寔，庶得周詳。或買獲西貨何項以充公需，亦煩爲之飭屬詳加檢驗平價和買。其鑒牧所延之人，所買之貨，如因有西船駛到本國沱瀼汎，或前往嘉定可以随便寄搭者，祈貴職轉飭船主照認載來，俾獲妥濟，誠忝職将銘感於無既矣。新韶布令遥禱台禧。今肅書。嗣德貳拾年正月初參日。

67） Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ*, p. 45.

68） Rapport du directeur des Colonies au ministre de la Marine et des Colonies, 14 juin 1867, Archives du ministère des Colonies, Indochine ancien fonds, A 30 (10), Archives Nationales d'Outre-Mer (Aix-en-Provence). この文書は Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ*, p. 45 の脚注 83（ただし史料典拠は明示せず）および Trương Bá Cần, *Hoạt động ngoại giao của nước Pháp nhằm củng cố cơ sở tại Nam Kỳ*, p. 196 でも部分的に参照されている。

69） 坪井『近代ヴェトナム政治社会史』，66 頁および Sunny Le Galloudec, “ La prise de Tourane (Đà Nẵng), 1858-1860,” p. 250.

70） *La Semaine religieuse de Paris*, 27 juillet 1867, pp. 106-107.

71） Vĩnh Sính, “Phải chăng Nguyễn Trường Tộ đã gặp Y-Đằng- Bác-Văn?,” in Viện khoa học xã hội tại Thành phố Hồ Chí Minh và Sở văn hóa thông tin Thành phố Hồ Chí Minh (eds.), *Nguyễn Trường Tộ với vấn đề canh tân đất nước*, Thành phố Hồ Chí Minh: Trung tâm nghiên cứu Hán nôm, 1993, p. 345.

72）1867年パリ万博と日本の関係については，寺本敬子『パリ万国博覧会とジャポニズムの誕生』思文閣出版，2017年の第1章および2章に詳しい。

73）Vĩnh Sính, “Phải chăng Nguyễn Trường Tộ đã gặp Y-Đằng- Bác-Văn?,” pp. 343-344.

74）阮長祚の「濟急八條」については，Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ*, pp. 225-281 で現代ベトナム語訳が試みられている。

75）『阮長祚條陳集（摺）』巻2，漢喃研究院所蔵，VHv. 2620/2，10a-b。

・・・日本與中國，漸見此機會。故今日本大差人遍往西方各國，以學習智巧，與窺伺理勢。現有一皇子，與三十五人，有一靈牧，與他同行，方在巴黎斯城，竝已設立一大學堂在這城，派人往學。大淸前日已請佛國兩人在嘉定者去上海做事〔在卑等西行之時〕。今又置一官在巴黎斯城〔鑒牧后現已與他相敍〕，以管買運器機。這員每年淸朝給祿十五萬貫〔今他已去北京〕。又請西人設立一大機廠在江蘇省。淸朝出與彼二十五兆貫，恣其所爲。又請西士來北京如康熙故事，以教習天文地理竝格物事而與中國文紳互相論難比試。・・・

76）カションについては寺本『パリ万国博覧会とジャポニズムの誕生』，118-120頁を参照。

77）フエからゲアンの省都であるヴィン（Vinh）までは，直線距離で約300キロである。

78）『阮長祚條陳集（摺）』巻2，111a-b。

・・・又稟鐵用一款。卑現與鑒牧厚・靈牧條，親到一大鐵廠。在巴黎斯城，到此與自京到乂安同遠。卑等在此一旬餘，只看各鑄鐵法，方知彼所以致富彊者，甚異于我也。其廠内工人約二萬〔這廠是私會，非是國事〕。其各機範，用以鑄火輪船・火車及各樣奇器，外一千座〔其一座可當一火輪汽機〕，每座價約五十萬貫，有十五火爐，每爐一日夜流鐵約三萬斤〔七年方改砌〕。凡各機器及各樣鐵片，各樣鐵器具，各國俱來兌買。・・・

79）『阮長祚條陳集（摺）』巻2，114a-115a。

・・・又稟西火枚一款。前日卑等始到巴黎斯城，靈牧條先行各處，探問事情。有一家做火枚，在彼城外遠處。已曾與他款曲，冀其可以學習也。迨到二派員到來，靈牧條先爲介紹，訂約與他。後日二派員同阮弘由火車到彼廠，觀看其可學習否。彼主人云，如要和買五六憶料〔其至大料者每一百，一貫二陌〕，彼卽許在廠三月，盡心指教，不取教錢竝食用錢。如不與彼和買而彼取教錢。二三百貫亦不屑取。若用二三千貫，則派員不受。看他口氣，如不要買，則受教錢二三千貫，亦可教也。派員極欲學習，而遲疑不決者在此。彼又引看各做法，各機盤，見其工夫最大，每一日能出十萬枚，其工人約外三百〔日本人現到他廠，買十憶枚。又買各機盤竝雇二工人，到日本立廠〕。他又問二派員，如要學習，當先學明化學，然後學之，三月藝成。以此二派員委決不下而回。且派員未有朝廷明嘱，卑等亦無錢自行。且待回來詳稟，若一定于行，亦已別有方法，或可就事也。・・・

80） これは一行が渡仏のためにフエを出発した時期を指す。

81） 英名冊・黎文富の二名については詳細を明らかにしえていない。なお一行が受領した銀錠を銀両額に換算すると，10 両錠が 30 個，10 両錠が 1 個なので，合計銀 310 両となる。

82） 原文では「鬮巧紙」。

83） 硃本，嗣德朝，第171集，102a-107b，嗣德21年4月1日，陳文道・阮増阮奏。
嗣德二十一年四月初一日。臣陳文道，臣阮増阮等奏。於嗣德十九年八月日，臣等奉派伴同鑒牧厚如西。至去年十二月日現回抵京，該一年零五箇月。此次欽奉頒給銀十兩錠各十五錠，竝随派之英名册・黎文富十兩錠一錠，共三十一錠。頗於去年在玻璨城，遇有鬮巧之期。四方來往不知幾倍。凡途閒車船物價，各項一一騰踊。再西俗與我不同。假如此一物也，民買則價稍賤，官長買則價稍高。此一車船也，民行則價稍下，官長行則價稍昂。意謂，官長則俸厚財多而別國之官自遠方來，勢必資囊尤甚餘裕。若有從中畧行較價，則他皆笑之。甚有不肯賣者，不肯許行者。滔滔風俗到處皆然。故此次臣等行止，不敢自稱爲官，亦不敢自稱爲民爲商。呼馬呼龍，各随人口。臣等凡事照我資囊，随他俗例，量行斟酌。有可從儉者從儉，有不可從儉者随他照辦。莫泛莫吝，務適其平。這頒給銀數三十一錠，僅足三師弟程途雜費而已〔如増買衣服・鞋襪・帕包・張被竝贈好知識，準許厨夫・門夫・園夫・車夫・船夫・引路夫・擡運夫・遞信夫・澣衣夫・沐浴夫及買辦日報紙・鬮巧紙與増買物食，觀看園林場所各項以至嗄程茶水等類，均係随到随辦，無有數册，難以枚擧〕。・・・至如此次往返秋龍城火車二次，停住秋龍城飯館二次，停住講道堂二次〔一在玻璨城，一在亞勒山城〕。其車錢飯錢數干，竝借暫買辦公貨數干，均由鑒牧厚代辦。仰懇勅下戸部照數給還，以清公款。・・・

84） 阮増阮と陳文道を指すと思われる。ただし彼らがキリスト教徒であった事実は確認できていない。

85） *APF* 40, 1868, pp. 171-172.

86） Eugène Louvet, *La Cochinchine religieuse*, tome 2, Paris: E. Leroux, 1885, p. 430. なおチュオン・バー・カンの著作によれば，この医師の名前は Hernaïz であり，ベトナムに渡ってから持病が再発したため，帰国を余儀なくされた。ゴティエはフランスから連れ帰った宣教師と医師に加え，帰路サイゴンで出会ったと思われる「歌撑（Ca xanh）」という名のフランス人エンジニアを，フエ朝廷に紹介している。かつて阮朝の所有する蒸気船（順捷汽船）の運用にも携わったこの人物は，給与などの条件面で朝廷側と折り合わず，雇用されずに終わった。Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ*, p. 50.

87） Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ*, pp. 46-47.

88） ソイエ（Joseph Sohier, 1818-1876）は MEP の宣教師であり，この当時南コーチシナ代牧司教の地位にあった。フランス本国の神学校を出た後 1844 年に渡越，南

コーチシナ代牧司教への任命は 1862 年のことである。ソイエはフエのキムロンに居所を構え，その隣接地には彼の指導下で 1867 年に教会が建てられた。阮朝側史料には「平（Bình）」というベトナム名で登場する。なお IRFA のデータベースの記すところによれば，1864 年，ソイエはベトナムでの学校（collège）建設に備えるため渡仏している。この学校について，「嗣徳帝はそれを望んでいるようだが，マンダリンが邪魔をしていた」とされる（https://irfa.paris/missionnaire/0472-sohier-joseph/　2024 年 9 月 6 日最終閲覧）。ゴティエに先駆けて行われたこの試みに関し，筆者はまだ対応するベトナム側史料をみいだせていない。

89） *Les Missions catholiques*, 14 août 1868, pp. 59-60. これと同じゴティエの書簡は，*APF* 40, 1868, pp. 438-440 にも掲載されている。

90） 『寔録』第 4 紀，巻 38, 6a-7a。廷臣らはこの上奏を「朝廷による『随宜処置の意』を理解しないもの」として批判し，嗣徳帝自身も反キリスト教勢力に与することはせず，「良（非キリスト教徒）か道（キリスト教徒）かに拘わらず，偏見に固執し狼藉を働く者は，リーダーのうち 1 ～ 2 名を見せしめとして処罰し，迅速に罪を悔いて刑に服させるのだ」とコメントしている。

91） 当該文書の現代ベトナム語訳は，Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ*, pp. 469-471 に収録。

92） 『阮長祚條陳集（摺）』巻 3，漢喃研究院所蔵，VHv. 2620/3，13b-16b。
・・・此次卑職已悉心料理各事，期于南國有利而小損。如朝廷爲底于行，一面設場教習，一面随學生進益如何而添買器具。初由小而漸大，由淺而入深。那辰果有得力，再行添雇精藝的人，大爲教習如西方，此方得大用。存如此次惟啓其端發其蒙，俟南人漸與西方濡染爲入手開頭而已。但亦視學生勤怠及其情性苦好如何耳。故卑職未敢決定。如於西方一人學一藝學之多年，方能精熟。且其規矩已成，自少目染耳濡，触處皆學。其自然之性情易入，已易於南人幾倍。今朝廷若責以歳月必不能應命。且西國已有多方勸激方能俟人奮迅，如南國科挙焉。・・・

93） ベトナムに到来したヨーロッパ人宣教師と言語の関係でよく知られているのは，宣教師が非エリート層への布教を目指し，ベトナム語のアルファベット表記（クオックグー）を開発・使用したことである。しかし近年の研究よると，宣教師が現地で用いる言語としては，クオックグーと同等もしくはそれ以上に，漢文・字喃が重要な位置を占めていたとされる。牧野元紀「パリ外国宣教会西トンキン代牧区における布教言語」『ことばと社会』9，2005 年，148-175 頁。

94） 当該文書の現代ベトナム語訳は，Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ*, pp. 465-466 に収録。

95） ここではゴティエともに渡越した医師の Hernaïz を指すか。

96） 『阮長祚條陳集（摺）』巻 4，68b-71b。
嗣德貳拾壹年貳月參拾日。鑒牧呉嘉厚爲将設教各理宜逐條計開于左。計。

一款，宜于使館暫作教場可否。

𠃊靈牧吧教士議唎，於使館空便，爲坭尼湿氣凛。各圖一羅机器毛虚凛。吏空固埃通言朱。丕嗔於𨔵金竜買便各理，如缶固鼬詞釘後。

一款，教士三人何人教何藝。

靈牧通別法算，本圖各渃天下，印膀〔光学〕，電氣，分五金朱別尼固次坦次硦仪，辰固仍𩣡之。靈牧同，別法算，天文，都度數𥑮至麻畫圖本，都天尺朱特趍淩，別法求卨求遠，別都坦朱別尼事卨尼事湿，別本圖各渃天下，別用傳信繩，別爲収雷柱。教士辰空吽學徒特，爲礙聰，双拱执靈牧通麻分各性五金五行。吏別爲藥吧嗔朝廷指朱蔑坭底立蔑園，耒趍各坭劍固𩣡草木之爲藥特辰迻衛檜鼬園仪朱馱些別麻用。

一款，每月給費各數干。

各馱仪固意执茹渃麻催，空固意閙恪，双嗔茹渃給朱妨踏柴侀晇黙吧消用鼬茹。丕蔑腩頭鄤，辰嗔每馱𠃊羂貫，朱特纖所各圖例銷用鼬茹。群黏辰嗔每腩每馱蔑羂貫，底晇黙吧税苦侀。茹渃空沛給添之女。

一款，擇學生每人教數干。

欺學生缶曉別辺繞，辰拱吽特繞馱蔑吝。群欺頭辰庫吽欣，朱馘蔑柴吽迸馱辰妨。

一款，學生用于歳人。

學生悶學喈富浪沙辰沛撰自十二至二十歳。朋学藝恪，辰自二十至三十歳。

一款，學生費用每月數干。

役仪黙量朝廷。双碎衹扢浪茹渃黷朱馱些包饒辰馱些亘罨飭學閉饒。群欺吽衛電氣吧分五金，辰損炭桧凛。朱馘昿仪柴吽學仕嗔寅寅。

一款，留何人于人以便通言語。

欺立場𨔵金竜辰翁鑒牧平仕朱蔑馱羅靈牧書通言朱。・・・

97）フエの使館（sứ quán）として普通知られているのは，1875 年にフランスとスペインの外交使節がフエを訪れた際，一時滞在した施設である。この施設は使節の来訪にあわせて建造されたもので，フオン河にかかるチュオンティエン（Trường Tiền）橋のたもと，現在フエ師範大学がある場所に位置していた（Võ Hương An, *Từ điển nhà Nguyễn*, tập 2, California: Nhà xuất bản Nam Việt, 2015, pp. 196-197）。ただ引用史料で使館に言及がなされているのは 1868 年時点でのことあり，時期が符合しない。この問題については現時点でこれ以上論じる材料がないため，後考を待ちたい。

98）『阮長祚條陳集（摺）』巻 4，71b-72a。

鑒牧平・鑒牧厚叩稟爲乞審炤事。茲拠鑒牧同，靈牧通，教士等所稱，「教學一款，工役甚繁，机器甚多。非高廣清燥之堂，不能設教。窃想萬春社連接卑家之東南邊，有空曠一頃約二畝。明媚可觀，勢可設場。懇準公帑築一教場，永爲國學。該等情願指示圖式構造，依如西國之場，方能設教。再該等乞暫住卑家，以便試行，免費

光陰」各等語。卑等窃想，該之所乞，亦有可原。如蒙準允，非惟該既遂其所願，而卑之往來繙譯，誠爲甚便。但事關國體。輒敢具陳，伏望工部堂官大人閣下斗炤，以事代題。幸蒙俞允萬頼。今叩稟。向上卑字係鑒牧平所稱。嗣德貳捨壹年貳月參拾日。鑒牧平・鑒牧厚仝記。

99）当該文書の現代ベトナム語訳は，Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ*, p. 473 に収録。チュオン・バー・カンはこの訳文において,「西朝外国大学士」をフランス外務大臣と訳出している。

100）当該文書の現代ベトナム語訳は，Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ*, pp. 466-468 に収録。

101）AAE, Mémoires et documents, Asie, 8MD/29bis, fol. 306-307. なお Vo Duc Hanh, *La place du catholicisme dans les relations entre la France et le Viet-Nam de 1851 à 1870*, tome II–III, pp. 238-239 に当該文書の翻刻が掲載されている。

102）原文の表記は Mich だが，これは明らかに当時西コーチシナ代牧区長であった Jean-Claude Miche を指す。

103）陳「嗣德時代ベトナムの近代化志向と香港」，47 頁は，この文書で商舶大臣が，ミッシュの預かっている物品を早くフエに輸送するよう要請したとする。しかし文書原文で商舶大臣の述べるところは，学校建設が実現しておらず物品は目下必要でない点，フランス側に輸送用の蒸気船を手配してもらえば手間と費用がかかるため，ベトナム側が回収に向かうまでの間，物品をしばしサイゴンに留め置くべき点にとどまっている。

104）Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ*, pp. 52-53.

105）Ibid.

106）硃本，嗣德朝，第219集，12a-16b，嗣德23年8月2日，礼部覆奏。

・・・奉照，嗣德二十一年二月日，鑒牧呉嘉厚承派如西公回。買納各項，經将進覧。嗣奉批，交臣部竝機密院臣派屬，遞交鑒牧平照認守整。就中引水筒一具，另由侍衛處収交武庫督工所，照式製作大盤。臣部節經派屬就該所檮看，現方製辦未清。竝派往鑒牧平住所，照檮諸物項，歸置亦得穏整。至如設立家屋之款，此次機密院臣酌擬内一款,「呉嘉厚帶來教士等名，應設學堂教習。請由承天府擬辦」。經該衙確勘近于鑒牧平住所閒有曠土一處，度一畝餘，可堪建設學場。嗣據名同，名通委禀,「應設學堂，要宜高廣方便教習。該等願将銀片附借人工速行營構一場，以爲國學。」該衙竊擬,「據如該等指示，閒架高廣，應需灰蛮磚瓦工料，倣至萬計，想非勘辦初意。況所請将他銀片附借，亦屬未妥。具由聲敍併将規式圖本進呈。」欽交臣部竝工部會同承天府勘擬，此次現方商擬未及繕覆。另奉硃批内一款,「所教未切緊用，煩費亦多，遴難得人。未合辰宜，姑且緩之」欽此。嗣而停罷。・・・

107）硃本，嗣德朝，第219集，204a-207b，嗣德23年9月2日，礼部覆奏。ルノーによれば，この西洋製機械の価格は約 20 万貫に上るが，一度購入すれば裨益すると

ころ極めて大きいという。またこの機械をベトナムの職人が製作することは可能か阮廷穂が尋ねたところ，構造の複雑さゆえ実物未見の職人がこれを作るのは困難だろうと答えている。

108）硃本，嗣德朝，第219集，243a-245b，嗣德23年9月15日，礼部奏。
・・・至初十日，據名通・名同等委稟敍,「該等自辭故里觀光上國，每圖益利無負所行。曩者該等商同鑒牧厚，工欲善藝必先利器。若徒手而行難以爲計。乃以事白與西官摘取官庫機括竝採買外附諸器具。得以教習子弟，俾之暗知西方機括，各得製作需用。不圖中止，該等自安留居行教。其這等機括，尚置在嘉定。・・・」

109）硃本，嗣德朝，第231集，113a-115b，嗣德23年閏10月6日，礼部奏。

110）モンルジエの生涯については，*Les Missions catholiques*, 9 Mai 1879, pp. 229-230 に掲載された追悼記事によって概略を知ることができる。それによれば，学校建設が中止されてから 1871 年にゲアンのゴティエと合流するまでの時期，モンルジエはソイエのもとで，若年のクリスチャンを対象とするフランス語および初等科学の教育に携わったらしい。しかしこの「慎ましい学校」も，大臣たちの反感を買い成功することはなかった。

111）Trương Bá Cần, *Nguyễn Trường Tộ*, p. 58 および P. Hoằng, “ Tiểu sử cha Paul Nguyễn Hoằng,” pp. 454-455. このほか硃本には阮弘の活動を示す多くの文書が確認されるが，その分析は機を改めて行いたい。

112）*APF* 43, 1871, p. 241.

113）これはフエでの学校建設が頓挫したことを示すと考えられる。

114）*Les Mission catholiques*, 19 avril 1872, p. 299.

115）『寔録』第4紀，巻46，30a。

116）硃本，嗣德朝，第244集，44a-45b，嗣德24年9月17日，礼部奏および同53a-54b，嗣德24年9月20日，礼部奏。

117）*APF* 43, 1871, pp. 242-243.

118）『寔録』第4紀，巻43，4a-bおよび陳「嗣德時代ベトナムの近代化志向と香港」，48頁。ベトナム側史料による限り，この計画が実現したかどうかは定かでない。

119）Lettre de Mgr. Sohier à MM. les directeurs des MEP, 17 novembre 1874, AMEP, vol. 760, fol. 197.

120）『大南正編列伝』第二集，巻36，25a-b および Nguyễn Q. Thắng and Nguyễn Bá Thế (eds.), *Từ điển nhân vật lịch sử Việt Nam*, Hà Nội: Nhà xuất bản Văn hóa - Thông tin, 2013, pp. 908-909.

121）1878年の遣欧使節については，第105回東南アジア学会研究大会（筑波大学，2023年12月9日）で行った口頭発表をもとにして，現在別稿を準備中である。

122）この通訳の名は阮有琚（Nguyễn Hữu Cư，史料によってはNguyễn Hữu Thơ とも）といい，遣欧使節の旅程について貴重な日記を残した。Jean-Henri-Eugène

Peyssonnaux and Bùi Văn Cung, “ Journal de l ’ ambassade envoyée en France et en Espagne par S. M. Tự Đức (Août 1877 à Septembre 1878),” *Bulletin des Amis du Vieux Huê* 7-4(Octobre-Novembre, 1920), pp. 407-443.

後記：本稿は科学研究費補助金（課題番号 23H0067, 24K16174）による研究成果の一部である。

（人文学研究科准教授）

SUMMARY

Nguyễn dynasty's modernizing policy and Christianism in the late nineteenth Vietnam

Yoshihiro Taga

This study discusses the role of French missionaries and Vietnamese Christians in the Nguyễn's modernizing policy in the late nineteenth century. It examines the envoy to France dispatched by Emperor Tự Đức in 1867. Jean Gauthier, a French priest from the Paris Foreign Missions Society (Mission Etrangères de Paris), led this envoy. He accompanied Vietnamese Christians, such as Nguyễn Trường Tộ and Nguyễn Hoằng, as well as two court mandarins. This 1867 envoy aimed at procuring goods to transfer Western technologies to Vietnam. A significant part of these goods was various equipment for the university planned to be established in the imperial capital, Huế. Gauthier also brought two French colleagues back to Vietnam to run this university. A periodical published in Paris at the time described Gauthier's mission by evoking the act of Matteo Ricci in Ming China.

Despite the Tự Đức's enthusiasm, Gauthier's project was hindered by multiple factors: the upsurge of anti-Christian sentiments within and without the court, rising tension between the Nguyễn and French colonial authority caused by the latter's annexation of the Western part of Cochinchina, and the heavy financial burden expected to occur in the construction of a Western-modeled university. This led to the abolition of the university project, embraced by Gauthier, shortly after the mission returned to Vietnam.

However, this failure did not mean that Huế lost interest in the transfer of Western technologies. Nguyễn archival records attested that, even after the suspension of Gauthier's university project, Tự Đức still showed eagerness to use Western technologies relying on missionaries' knowledge. Likewise, the growing involvement of Vietnamese native priests in court modernizing policy can be seen in the case of Nguyễn Hoằng, who came to distinguish himself in Tự Đức court as a capable interpreter.